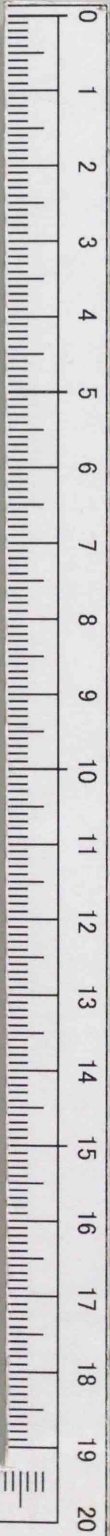


改新帝國讀本

卷七

4a
810
昭5



41557

教科書文庫

4
810
41-1930
20000 71956

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

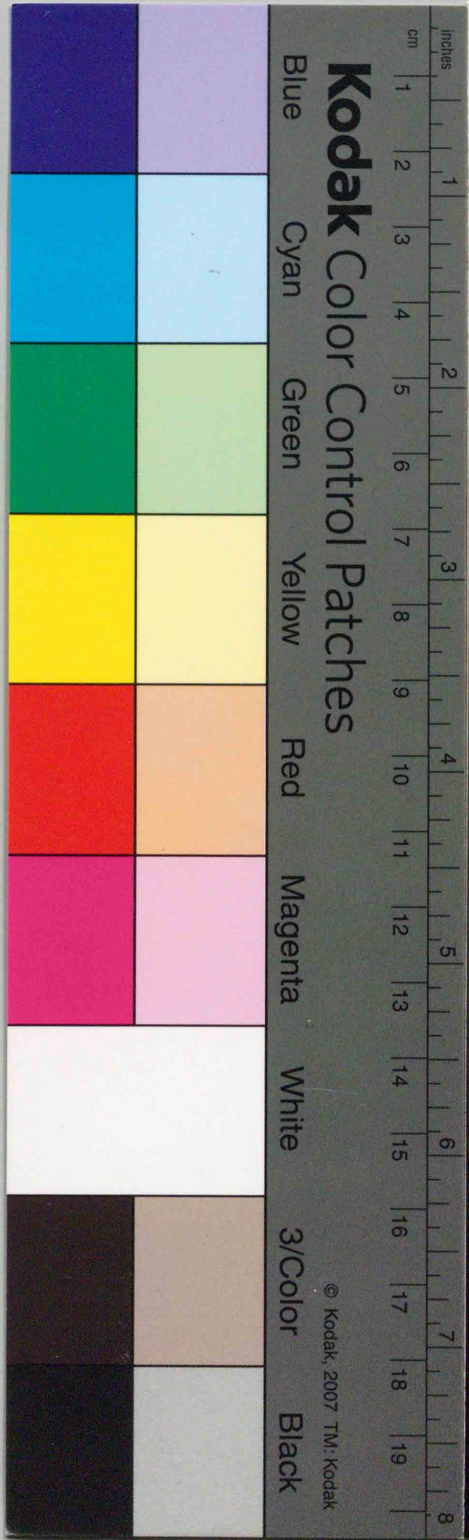


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

濟定檢省部文

用科語國校學中 日四十月二年五和昭

42
810
AB5

改新帝國讀本

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

東京

合資
會社
富山房發兌





神
勅
關
來
觀
筆

改新帝國讀本 卷七目次

一	春の風……………	土岐善磨……………	一
二	日本の國體……………	……………	四
三	新文明の建設……………	金子堅太郎……………	一〇
四	櫻あらしひ……………	(狂言)……………	二〇
五	櫻咲く日本よ(自修文)……………	吉田絃二郎……………	二三
六	詩人西行……………	藤岡作太郎……………	二九
七	をりふしの移り變り……………	吉田兼好……………	三五
八	晚春の別離……………	島崎藤村……………	三九
九	南都……………	佐々木恒清……………	四七

目次

九 小松内府その一……………(平家物語)……………五三

一〇 小松内府その二……………(平家物語)……………五七

一一 平家物語論……………五十嵐力……………六四

俊寛(自修文)……………菊池寛……………七三

一二 川柳點……………金子元臣……………八六

一三 青葉若葉…………………………九三

一四 信濃路の旅……………正岡子規……………九四

一五 奥の細道その一……………松尾芭蕉……………一〇三

一六 奥の細道その二……………松尾芭蕉……………一〇八

一七 郷土の魅力……………相馬御風……………一一三

一八 天地の心……………(短歌新調)……………一二一

一九 芳流閣上の血戦……………瀧澤馬琴……………一二六

根分の後の母子草(自修文)……………瀧澤馬琴……………一三三

二〇 美しき故國……………矢代幸雄……………一三八

二一 西湖の月……………谷崎潤一郎……………一四四

二二 黄菊白菊…………………………一五三

二三 四季小品……………(近世諸家)……………一五四

一 春 雨……………中島廣足……………一五四

二 風 鈴……………香川景樹……………一五五

三 砧……………清水濱臣……………一五五

四 秋の山田……………藤井高尙……………一五六

五 冬のこころ……………伴蒿蹊……………一五六

二四 人格の表出……………倉田百三……………一五八

二五 新時代の修養……………杉森孝次郎……………一六四

附録

和歌百首……………一八

改新帝國讀本 卷七

一 春の風

一 柳を折る

岸の青柳ほのぼのと、
駒とめて手折る一枝を、
なごりや惜しき春の風、
したひてぞ吹きたなごころ。

二 春のながめ

國破れてやま河はあり、
春なれや城邊のみどり。

(一) 土岐善磨

折^ル楊柳^ヲ揚^テ巨源^ニ

水邊、楊柳綠煙、繖

立^テ馬^ヲ煩^シ君^ヲ折^ル一枝^ヲ

唯有^リ春風^ノ最^モ相^シ惜^{シム}

慙^ニ更^ニ向^テ手^ニ中^ニ吹^ク

(二) 春望(杜甫)

國破^{シテ}山河^在

城^ニ春^ノ草^木深^シ

(一) 歌人。東京朝日新聞社調査部長。明治十八年東京に生れた。鶯の鳴いた。斜昏に。線の斜面に。集や隨筆物の著が多い。字は景山。

(三) 唐の大詩人。字は子美。

のろし

(一) 唐時代の人。
字は千里。

(二) 元時代の人。

花みれば涙しとゞに、
鳥聞けばこころ驚く。
のろしの火みつき絶えせず、
千重にこひしふるさとの文。
しら髪はいよよ短く、
かざしさへ挿しもかねつる。

三 山の亭の夏

青葉かげ夏の日ながさ、
池みづに影さすうてな。
みす返すそよ風吹きて、
香どあふるゝ一枝花薔薇。

四 秋の思

西風さむく雁おちて、

感時花灑涙。
恨別鳥驚心。
烽火連三月。
家書抵萬金。
白頭搔更短。
渾欲不勝簪。

山亭夏日(高駢)

綠樹陰濃夏日長。
樓臺倒影入池塘。
水晶簾動微風起。
一架薔薇滿院香。
秋思(孫存吾)
雁落西風字字沈。

花の園の梅
りたひと
情を影づめ
たりあやなす水
浅み香や
はかみる香
夕月夜と
まり感へと
霜の鳥蝶
すはらみ
すさみつ
さまよへば
檀板も
用もなし
(山園小梅)
衆芳搖落獨暄
妍芳占盡風
疎影橫斜水清
淺黃昏霜動
欲下先偷眼
粉蝶知何在
微吟可相狎
不須檀板共金尊
(林和靖)

蓮ひえびえと花散りぬ。
おもひわびしき事々を、
夜ひと夜うたへきりぎりす。
五 子に寄する
家のうち皆つゝがなし。
はたつ物も庫にあまれり。
いへづとは送るもよしな。
つとめ勵み報いよ御代に。

寄子(徐氏)

家内平安報爾知。
田園歳入有餘資。
絲毫不用南中物。

(原文日本式ローマ字)

Sono no Ume.

Hana mina hirite tada hitori.
Sono no Hazei wo atumetari;
Kage zo Aya naru Mida asami,
Ka gawa sakururu Jidukiyo;
Tomari madaeru Sino no Tori.
Gyo wa Kokoro wo midasu nan.
Kuteirusami futu samayocha,
Danban mo Sake mo Jo mo nari.

Foki-Kenmaro.

蹟筆磨善岐士

嫩涼偷入藕花心。
眼前多少關心事。
付與寒蟬徹夜吟。

好作清官啓聖時。

鶯の卵

二 日本の國體

余がドイツ留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を帶びてゐる男爵(1)ゾーボルト氏の演説を聽いて感じたことがある。それは、西洋各國の革命は國王に對する不滿から起つて、その結果はいつも王室の權威を縮小し、或は全く王室を顛覆するのであるが、日本のはこれに反して、改革毎に稜威を増し、繁榮を増進する。といふ説であつた。これは、いかにもよく我が國體の萬國に異なることを言明したものである。

かの大化の改新といひ、明治の維新といふ如き政治上の大變動は、我が國なればこそ極めて容易に成就したのである。新しい文化に接してこれを採用する必要の生じた時、制度改正の詔勅が一度煥發すれば、祖先以來の領土領民を差出し、既得の權利をも悉くう

(1) Ziebold
ドイツの人、
日本の外務省
にあつたことが
ある。

煥發
たつた

唯々諾々

ち棄てて、唯々諾々として大命を承るといふことは、決して外國には有得べからざる事實である。これでこそ我が國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴なつて進歩したのである。かういふ場合には、外國では必ず國王と國民との衝突を免れぬ。衝突して國王が散々な目にあはされた例は、枚舉に遑ないほどである。

元來、革命といふ語は、易に「湯武革命、順乎天、而應乎人」とある語から出たので、支那人は昔から天子は天の命を受けて百姓を治めるものといふ思想をもつてゐる故、聖人賢者たる以上は、誰が代つて天子になつても構はぬのである。これが爲に歴代二十六朝、長い朝廷でも六百年とは續かぬ。その時には天の命が革つたものと覺悟して、平氣で新しい天子を戴く。かういふ國々には、決して大化の改新や、明治維新のやうな改革が行はれるはずはない。

西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起つて、或は權力

興望
素性

(二) 壯士不_レ死即
已。死即_レ擧_二大
名_一耳。王侯將
相寧有_レ種乎。
〔史記〕

覬覦
地はやわら
けいこもす

(二) 徳川光圀の撰

(三) 河内の人。禪
師。孝謙(稱徳)
天皇に仕へた。

を以て、或は興望によつて、遂にその位を贏ち得たのである。素性を洗ひ、祖先を正せば、同等な國民である。これが他の國民の王室に對する考であらう。日本人は皇室を我が國民とは一種別なものと見てゐる。支那には、王侯將相寧有種乎。といふ語があるが、日本人は帝王の位は國民の決して覬覦すべきものでないと、祖先以來考へてゐる。長い歴史の中には、皇室に向かつて弓を引いたものもないではないが、天子の位をねらはうといふやうな考を起したものは決してない。(二) 大日本史には、源義朝や源義仲が叛臣傳に入れてある。これは天子に向かつて敵對したことの、大義名分を正じたのである。これ等の人は、多くは朝廷の或官位を得ようとして、それが得られぬ爲に騒動を起したので、皇室を覆さうなどいふ考は毛頭もないのである。叛臣と雖も、朝廷の尊さをば忘れぬのである。平將門も檢非違使になれなかつた爲に謀叛したのである。たゞ一人弓削道鏡

(一) 大分縣宇佐郡
宇佐町に在る
宇佐神宮。

廢立

(二) 藤原道長の歌。

(三) 平重盛、清盛
の長子。

といふ僧が、佛教王法を一つにして、自分がその位に坐らうといふ不届な料簡を起したが、忠誠な臣民の聲は宇佐八幡の神託となつて、忽ちこれを排斥した。その外には一人もない。

藤原氏が廢立を行つたといつても、自分の女の生んだ皇子を皇位に即かせたいといふ欲望なので、これが即ち人間としての最大欲望であつた。その欲望さへ達すれば、

(二) この世をばわが世とぞ思ふ望月の
かけたることもなしと思へば

といつて、大満足をしたのである。

平清盛は利己主義の結晶で、入る日を招き返したといふ傳説のあるほどであるが、これとても、平氏といふ家柄で太政大臣といふ人臣の極位に上つたのを、家門の大名譽と信じたのである。彼のがまゝが募つて法皇を幽閉しようとした時、小松内府が

蓮府
槐門

先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が
無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門
の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあ
らずや。

と諫めたので、入道も弱りきつて、その言に従つたのである。

承久の役には、北條泰時がわざわざ途中から引返して、

若し道のほとりにも、はからざるに忝く鳳輦を先立てて御旗を
揚げられ、臨幸の嚴重なることもはべらん。に参りあへらば、その
時の進退いかかはべるべからん。この一ことを尋ね申さんとて、
一人馳歸りはべりき。

(一)泰時の父。

といふに對して、義時は

賢くも問へるをのこかな。そのことなり。正に君の御輿に向かひ
て弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は、胄を脱ぎ、弓の

弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。

と答へた。

吉野朝時代の足利尊氏にしても、たゞ征夷大將軍だけの野心で、
皇室を陥れようなどといふ非望はもつてゐなかつた。我が國の戰
亂を支那歴代の戰亂などと同様に見るのは、大きな間違といはな
ければならぬ。いかなる悪人でも、謀叛人でも、皇室を尊ぶ考は必ず
もつてゐたのであつて、支那や西洋諸國の國民のやうに、をりがよ
くば取つて代らうなどといふ考の如きは、毛頭微塵ないのである。
これが外國人の眼からは不審に見える。我が國民の性質を知ら
ぬ人の眼からは、萬世一系といふことが、いかにも不可思議に感じ
られる。世界に唯一であるから、もとより不思議には相違ない。グー
ルボンだの、^(一)ホーヘンツォルレンだの、^(二)ロマノフだの、^(三)劉氏だの、^(四)李氏
だの、^(五)愛親覺羅氏だのと、外國の朝家にはそれぞれ姓や朝號がある

(一) Bonbon.
フランスの王
朝。
(二) Hohen-
zollern.
ドイツの王朝。
(三) Romanof.
ロシアの王朝。
(四) 支那の漢時代。
(五) 支那の唐時代。
(六) 支那の清時代。

金言

〔子爵、樞密顧問官、嘉永六年（一八三四年）筑前國島飼村に生まれ、明治初年より國事に勤められたる。〕

が、我が皇室にはそれが無い。この道理がわからなければ、日本の歴史を理解することは出来まい。開闢以來、君臣の分定まれり。といふことは、別段歴史上の説明を待たなくとも、有史以前から我が民族の腦裏に浸みわたつてゐた金言である。

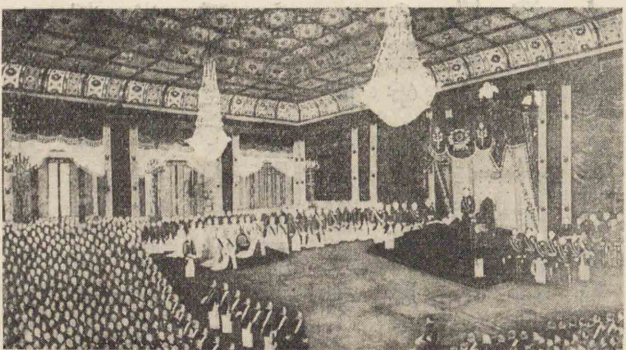
三 新文明の建設

〔一〕 金子堅太郎

明治初年より今日に至る五十餘年の間に於ける、日本文明の進歩といふことに思をいたすならば、まづ思ひ起すのは、かの明治二十二年の憲法發布と帝國議會開設とである。これは世界の政治家學者のみならず、實に多くの海外諸國民を驚かしたのであつた。西洋諸國は、日本に於て憲法の發布されるなどといふことは不思議である。とまでに思つてゐた。されば議會の如きも、〔二〕アングロサクソン人によつて初めて成立せられ、可能とせられるところのもの

〔Anglo-Saxons.〕

〔Turkey.〕



憲法發布の布

ので、その生活または傳統を異にする日本人の間に、これが行はるべきものとは彼等の多くは思はなかつた。實際それより以前トルコはこれを實行せんとして失敗に歸したことがあつた。これなどから見ても、これがアジヤ民族の間に行はるべきものとは、彼等には思へなかつたのである。自分が明治二十二年、歐米諸國を廻つた時に實際聞いた批評は、多くはかくの如きものであつた。然し、自分は日本がこの度憲法を行ふやうになつたまでの経過を、日本の歴史に基づいて説いたところ、
「左様か。」とはいつたが、腹の中では、何がアジヤ民族の、しかも一小島國たる日本にアングロサクソン人の生んだものが眞似られるも

のか。と笑つてゐたやうである。然るに憲法發布を見、帝國議會の開設となり、更に日清戦争が開かれるや、日本は連戦連勝の勢を示すに至つた。これは實に外國が想像だにしなかつた日本の世界的雄飛の第一歩であつた。即ち歐米の進んだ文物を、日本はよく容れることが出来たといふことを證據だてたのである。かくの如く歐米の文物をよく消化してこれを巧に利用し、而してかの強大な支那を征服したといふことを聞いた歐米人等は、全く驚歎の聲を發したのであつた。なほまた日露の戦争となり、再度強大國を征服したのであつた。また近くはかの歐洲大戰に参加して、このアジアの一小國が如何に歐米の文明を消化し、これを利用するかといふことを實證するに至つた時、歐米人は驚くのみか寧ろ我等に恐怖を感じたのであつた。數十年の間に於ける我等のかくの如き發達は、實に世界無比の

出來事であつた。歐米人が三百年の年月を積んでやつと獲た彼等の文明を、僅々五十年の間に輸入して日本の文明を築いたといふことで、歐米人等は日本は誠に恐しい國であると感ずるやうになつた。

日本が、實際、歐米の文明に基づいて僅かな間に非常な進歩を示したといふことは、何人も否むことは出来ない。即ち歐米の知識を取入れ、國を立憲政體とし、教育軍事等から、商工業の設備までも、彼等の教を俟つたことはいふまでもない。かくの如くにして、歐米よりの新文明に基づき、新日本の文明を築くに至つたといふことは、全く歐米先進國の援助に基づいたもので、これは我等日本國民として忘れてはならないことである。例へば陸海軍の顧問として來た者、當時の教育界或は憲法國法諸法典の編纂に寄與した者、或はまた商工業の計畫にあづかつた者、その他精神界に於ては宣教師

等の如き、各般の我が新文明の建設にあづかつた者は皆歐米人であつた。これは我等のみづから深く銘して常に感謝してゐるところである。

外人にいはしむれば、日本の今日あるは、實に歐米の文明が輸入された賜であり、一にペルリ來朝以後、海外の新文明に據る急激なる進歩であるとするのであるが、然し歐米の文明といふ種子が蒔かれたとしても、その土地が瘦地ならば、芽ぐみ、花咲き、實るといふことは困難でなければならぬ。否、不可能でなければなるまい。良き種子は、肥えたる地に根をおろして始めてよき實を結ぶのである。さればたとへ歐洲文明といふものが良き種子であつたとしても、これが蒔かれた土地が瘦地ならば、花咲き、實るといふことはなかつたであらう。歐米人等は直ちに文明の種子を與へたといふことをいふのであるが、然し我等は種子が與へられたことを忘れぬと

同時に、その土地がその種子を十分に實らせるだけの肥地であつたといふことも忘れてはならぬのである。

我が建國より二千五百年、また支那文明の渡來より一千五百年、その間に於て我等みづからの文明を築きつゝ、あると共に、外來の支那文明の咀嚼と消化に年月を積み、而してここに立派な日本の國民といふものを作つてゐたのである。既に足利の末期に於て、日本に來た歐米人が、歸國後その國王に日本といふ國は立派な國であると、感心した旨を上奏したことがあるといふくらゐである。

織田、豊臣、徳川にかけての二百七十年といふ長い間、日本は封建時代として、近代文明の新日本に到達する基礎を固めたのであつた。即ち國民を強大にし、忠君愛國の魂を基礎づけ、二千五百年以來の日本國民の精神をいやが上にも鍊磨したのであつた。而してこの間に雄大なる人種としての日本を築いたのであつた。

一方から見れば、この間に世界各國との交通が閉されてゐたといふ不利があつた如くであるが、然しこれは寧ろ日本独自の基礎を強固ならしむるに好適な時代であつたともいへるのである。而して内的に、歐洲諸國に劣らざる文明を築いてゐたのであつた。この點に於て日本の封建時代といふものは、他の諸國にあつた封建時代とは、かなり性質を異にしてゐるものである。實に日本の今日の文明は、二千五百年來の歴史に基づいてゐると同時に、この封建時代に、一層新しい外國文明を入れて、それを消化するだけの力を十分に養つてゐたのであつた。

かくの如き基礎を有する日本が、一朝開港すればそこに新しい歐洲文明といふものが入り來つて、忽ちそれが花となり、實となつたといふことは、決して不思議ではなかつたのである。一國民或は一民族の文明といふものは、一朝にして起るものに非ざるは歴史

綜合

に徴しても明らかである。歐洲の文明も一朝に生まれたのに非ざること勿論であるが、これが異邦に渡つて、その地方或はその民族の新文明となるにはこの基礎がなければならぬ。日本は決して、たゞ歐米の文明を追うてゐるのみではないので、二千五百年に蓄積され、鍊磨された國民精神は、一の導火線を得て、眞の活躍をなすに至つたのである。

多くの外人等は、動もすれば、日本が今日に至つたその近因たる、歐洲新文明の輸入といふことのみを見て、日本の文明は歐洲の文明が新たに築いたものであるかの如くに、皮相の見をなすものも少くないやうであるが、これは歐洲が今日の文明の域に達するに、長い年代を重ねて來た如くに、日本の今日に達するまでも、矢張り國民精神の建設と文明に達する習練とが長い間積まれてゐたのであつた。たゞ歐洲の文明は、彼等みづからの、逐次の所産の綜合

であるのに對して、日本の文明は、歐洲のそれによつて暗示され、誘導されたといふ點に於て異なるが、その基礎たる精神の建設時代といふものは、彼等と同様なる長い年月に於て、多くの犠牲や習練を經來つたのであつた。蓋し、日本の今日の文明に達するだけの資格と伎倆とは既に十分に培はれてゐたのである。

時恰も、かくして十分なる基礎の備へられた時、新文明——しかも人類の當然到達すべき機運に接觸したのであるから、ここに日本の新文明が一時に築かれるに至つたのであるが、これは上述の如く準備ある日本としては、當然なことといはなければならぬ。かゝる意味よりして日本は新舊東西兩洋の文明を咀嚼し、調和してゐる世界唯一の國といふことが出来るのである。これに對する多くの外人の皮相の見はたゞ歐洲文明が移されて以來の變遷にのみ眼を注いで、歐米人が數百年の苦惱の後に達した文明に、日

本人は五十年を以て達したと驚き、或はこれを怖れるといふが如きは、彼等が日本の歴史を知らざるが故の結論でなければならぬ。しかのみならず、邦人間に於ても、動もすれば、日本の今日の文明は、全く歐洲文明によつてのみ達し得られたとなすが如き者のあるのは、遺憾に思ふところである。

かくの如き歴史に基づいて達したる今日の日本の文明は、決して歐米のそれに劣るべきものではない筈である。寧ろ世界のすべての文明を備へてゐる國民として、今日の文明國間に、我が日本の右に出づるものはないのである。而してかくの如き基礎に立つた日本の文明は、將來の宇内の文明に貢獻するところのものたることを信じてやまぬのである。

明治文化發祥記念誌

四 櫻あらしひ

えいたさぬ

「アト」これはこの邊のものでござる。この頃はいつ方も花の盛ぢやと申すほどに、花見に参りたう存ずれども、暇ひまがなさに参ることもえいたさぬ。もはや暇になつてござるほどに、けふは花見に参らうと存ずる。まづ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい、やい、太郎冠者あるか。「シテ」はあ。「アト」おたか。「シテ」お前に居ります。「アト」汝を呼出すこと別のことではない。この頃は方々花盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。もはや暇になつたほどに、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。「シテ」これは珍しいことを仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申すほどに、櫻を御覽ぜられうとあれば、尤もでござるが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらる。「アト」いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じ

頼うだ人

言語道斷

でもないこと

(一)紀貫之の歌、拾遺集卷一春の部に出てる。

ことぢや。「シテ」これは頼うだ人とも覺えぬことを仰せらる。「さやうに仰せられたらば、人中で耻をかゝせられう、身どもは苦しうござらぬが。「アト」して、汝がそのやうにいふは仔細があるか。「シテ」なかなか、仔細こそござれ。はなが見させられたくば、私のはなを見させられ。餘所へござるまでもござらぬ。「アト」いや、汝は言語道斷のことをいひ居る。汝が面なは鼻といふ。花といふは別ぢや。「シテ」さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。「アト」なかなか、でもないことをいひ居る。その歌を讀うで聞かせい。「シテ」讀うで聞かせたらば、肝を潰させられう。「アト」急いで讀め。「シテ」心得ました。

櫻(一)ちる木の下かぜは寒からで
そらに知られぬ雪ぞ降りける
これはなんと。「アト」此方にも花といふ歌がある。「シテ」さらば讀うで

(一)平忠度の歌。平家物語卷九に出てゐる。

(二)よみ人しらす。古今集卷一春の部に出てゐる。

(三)小野小町の歌。古今集卷二春の部に出てゐる。

總別とむざとしたこと

聞かせられい。

行きくれて木の下かげを宿とせば

はなや今宵のあるじならまし

シテ「この方にもまだござる。」

やま櫻わが見にければ春がすみ

峰にも尾にもたちかくしつゝ

アド「それならこちにもある。」

花の色はうつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

シテ「それならば此方には謠にござる。アド「うたへ、聴かう。シテ「櫻か

ざしの袖ふれて。アド「一段の謠うたふいたしやうがござる。やい太

郎冠者。花見車くるゝより、月の花よ待たうよ。月の花よ待たうよ。

シテ「はあ、これでつまりました。アド「總別何も知り居らいで、むざと

したことをいひ居つて、某と競合ひ居る。彼方へ失せい。シテ「はあ。アド「えい。シテ「はあ。——續狂言記——

自修文

櫻咲く日本よ

吉田 絃二郎

身を分けて見ぬ梢なくつくさばや

よろづの山の花のさかりを

これほどに花に對して貪るばかりの愛着を感じた詩人が、世界にあるであらうか。

然し、この花に對する愛着の念は、日本人にならば西行ばかりでなく、殆どすべての人に見出すことが出来るはずだと思ふ。殆ど私たちがすべてが春になれば、見ぬ梢なく花を見つくさうと思ふ。

日本といふ私たちの祖國が、一番はつきり私たちの心に刻みつけられてくるのは、櫻の花が咲く日である。花が咲いてくれば、日本人全體が、世界のどこかの詩人よりも花を愛し、花をたゞへることを知つてゐる。西行の歌はたまたま

(一)西行の歌。一首の意は、一つの身では同一時に咲く全國の花を見ないことからはできないから、身も分け、全國の花の盛をすべて見つくしたいものだ。

(二)小説家。早稲田大學教授。明治十九年佐賀縣に生まれ、た。礦山で働いた。草光る。運命の秋。芭蕉等多くの著書がある。

祖國 祖先からの國。

旅枕

たびね

(一)岩手縣西磐井郡平泉村。

潮煙 海水のしぶき。

聖地

靈場。

(二)Chaucer. イギリスの詩人。西暦一三〇〇年—一四〇〇年。

(三)Canterbury Tales. イギリス古文書の傑作である。叙事詩である。カンタベリー朝の聖院に参詣する三十二人の人々が馬上で物語つた小話を集めた體に作られてゐる。カンタベリーの東南五哩で、イギリスの宗教上の首府である。

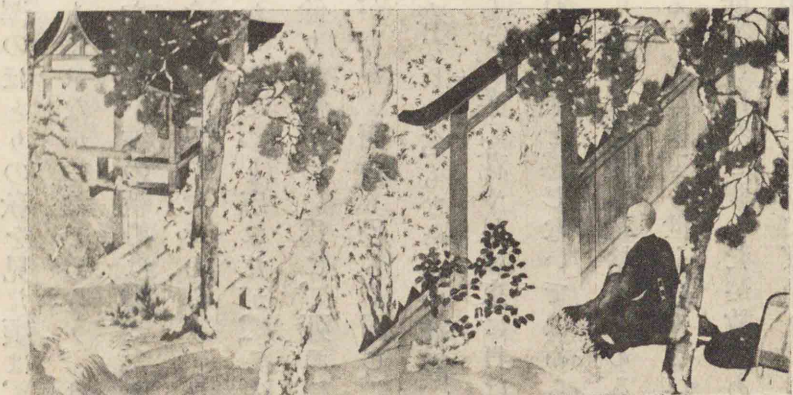
イギリス古文書の傑作である。叙事詩である。カンタベリー朝の聖院に参詣する三十二人の人々が馬上で物語つた小話を集めた體に作られてゐる。カンタベリーの東南五哩で、イギリスの宗教上の首府である。

日本人のすべての櫻の花に對する愛着を、代言したものに過ぎない。私は日本に生まれたことを有難いと思ふ。殊に花が咲く日にしみじみそれを感ずる。山の雪が解けはじめる。もう南の方からは花のたよりがくる。三月も半ば過ぎれば、薩摩、日向あたりの山櫻が咲きはじめる。その頃南方を立つて北の方へと日毎旅枕を重ねる人々は、三月の二十四五日頃になれば、北九州の山櫻が綻びてゐるのに出會ふ。中國から畿内、東海、東山と、北へ北へと旅を續ければ、短い花の命とはいふものの、勿來關、平泉まで行く中には、四十日以上の花を見ることが出来る。全く三月から四月と日本國中が花に包まれてしまふ。潮煙に閉されて、あるかなきかに見える小さい隱岐や對馬の島々までもが、日本である限りは、雲のやうな花に包まれてゐる。西洋では聖地巡禮といふことが昔からある。Chaucerの「カンタベリー物語」などを讀むと、今の日本の御彼岸の札所めぐりを思ひ出すが、もうああいふのんきな遍路は、かの地では遠い昔になくなつてしまつたであらう。

札所めぐり 禮拜の功德を つも爲に佛閣をめぐること

世捨人

(一)「心なき身にもあはれは知らざらねけりし夕暮」西行



西行 (矢澤弦月筆)

日本ではまた四國めぐり、大和めぐり、どこそこの新札所めぐりといふものが、なかなか盛んである。そしてそれは花の盛を中心にして行はれてゐる。札所めぐり、聖地めぐりといふが、實は花をめぐりての旅である。花遍路である。西行にしたところで、實に一生花をめぐつての旅人であつた。花巡禮であつた。彼は秋の山に鹿も聽いた。雪の野も歩いた。彼は寂しい世捨人のやうにも思はれる。けれども彼くらゐ日本の春を愛し、日本の春を解した詩人はないであらう。ねがはくは花のもとにて春死なん。彼は春に對しては貪慾であつた。しぎたつ

相すがた。あり

(1) Wordsworth

イギリスの詩人(西暦一七五〇年—一八

五〇年)

(2) Emerson

アメリカの文

學者(西暦一

八〇三年—

八八二年)

(3) 芭蕉の句

(4) 蕪村の句

(5) 谷口蕪村。攝

津の人。天明

三年(二四四

十八)歿。年六

澤のほとりの秋を見た頃は、恐らく彼は人生無常の相をその儘に受容れて、死も恐れなかつたであらう。けれども再び旅に春を見た刹那、吉野の花に包まれた日に、彼の執心は燃えたであらう。彼は二十年も三十年もなほ生き續けて行きたいと思つたであらう。ウォーヅウォースであつたか、エマーソンであつたか、ちよつと忘れたが、「この附近の風光は實にいい。たゞ一つ悪いことには、餘り景色がいい爲に、死ぬことがいやになる。」といふ意味のことを語つたことがある。西行も恐らく同じことを感じたであらう。伊賀から大和への道すがら、⁽³⁾「春なれや名もなき山の薄霞。」と歌つた日、芭蕉も恐らく同じことを感じたであらう。⁽⁴⁾「菜の花や月は東に日は西に。」に、⁽⁵⁾蕪村ならずとも、春の日の日本に生まれた幸福を感じないではゐられないであらう。西行も芭蕉も世捨人である。然し、印度あたりの世捨人とはまるで違つてゐる。どこまでも世を捨てきれぬ人たちである。彼等が世を捨てたといふのは、餘りに自然を愛したが故である。心ゆくまで自然に浸⁽⁶⁾されたい爲に、暫く世の煩はしさを避けたばかりである。自然を味はふといふ點では、誰をも彼をも受

淨化す
きよめくする。

萬葉時代

の意。萬葉集

は我が國最古

の歌集で、仁

徳天皇から淳

仁天皇の時に

ての歌を集め

たもの

分別くさい人

りさまへのあ

りさまの人

(1) 櫻本其角。芭

蕉の門人中の

第一人者。寛

永四年(二二

六七年)歿。年

四十七

(2) 服部嵐雪。芭

蕉の門人。寶

永四年(二二

六七年)歿。年

五十四

容れてゐる。日本國中の人々を一緒に誘ひ出して、自然を味はつてゐる。

日本人はこせこせしてゐるとよく非難される。然し、花の盛の日本人を見ると、あながちさうでもない。花に恵まれた日本の自然が、春の日になれば、日本人の心を特に淨化してくれるのか知らぬが、ともかく花の盛の日本人は、愛すべき國民である。⁽⁷⁾佛詣や神詣にかこつけて四國中をめぐり、大和をめぐつて、花を見て歩くことの出来る子供らしさを失はぬ民族である。西行といひ、芭蕉といひ、一生のなまけものであつた。日本の秋を、日本の春を残る限なく見つけたいが爲に、家業を捨てて歩きまはつた大きな子供である。

日本人ほど詩を作る國民は他にないであらうと誰でもいふ。私もさう信じてゐる。萬葉時代から日本人は、花下の行樂を無性に樂しむことを知つてゐた。日本人は愛すべきなまけものであつた。その中でも一番大きななまけものが、西行と芭蕉とであつた。それから後の世の歌人や俳人たちには、分別くさい人たちが多過ぎてしまつた。⁽⁸⁾其角にしる、嵐雪にしる、蕪村にしる、分別があり過ぎる。このことは、歌人の場合でもやはり同じことだが。

あてやか
上品
〔一〕さまさまの
こと思ひ出す
櫻かな〔芭蕉〕

それはともかくとして、日本人がこれほど多く詩を作るといふことは、やはり恵まれた日本の自然からであると思ふ。日本に櫻が咲く間は、日本人は恵まれてゐると思ふ。日本人は詩を作ることゝ忘れてはならないと思ふ。わけもなく懐かしい櫻。わけもなく暖かい感じの櫻。わけもなく可憐な櫻。わけもなくあてやかな櫻。わけもなく哀な櫻。わけもなく「さまさまのこと思ひ出」させる櫻。誰の爲に咲いてくれるのか、誰の爲に散つてゆくのか、待たれる日のみ長くて、散ることの餘りに早い櫻。

無常の實相を餘りに美しくも、餘りに痛ましくも私たちの心に刻みつけてくれる櫻。日本中の山も、原も、町も、けふは花の霞に包まれてしまった。私は恵まれた日本を思ふ。

西行も、芭蕉も、「花の咲く」けふは「浮かれこそ」したであらう。

けふは日本人にとつて一番明るい幸福の日である。と同時に、一番もの哀な日である。

五 詩人西行

藤岡作太郎^(一)

〔一〕國文學者。文學博士。石川縣金澤の人。石川明治四十三年(一八七六年)生。國文學全史、平安朝篇、繪畫史、國文學史、講話等の著がある。
天涯放浪の行脚僧
〔二〕藤原定家。
〔三〕二卷。西行の家集。

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しうし、鎌倉、室町の世、抑、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて定家の價値いたく墜落したれども、山家集^(三)の一書は、なほいかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に嘖々たるは抑、何の故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機につい

北面の士

厭離の志

(一)京都府紀伊郡に宮址がある。

ては、或は傳へていはく、曾て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、また明日を期して別る。次の朝參朝せんとして、約に隨ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死し給へり。とて、若き妻、老いたる母

あめそくはなたちはなまほとてやすきとときすくもになくなり
(藤原俊成の詠)

あめそくはなたちはなまほとてやすきとときすくもになくなり

蹟筆行西傳

惕然

(二)清信士度人經の偈句。

愛着の絆

(三)崇徳天皇の時。

の重り伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄^(一)恩^(二)入^(三)無^(四)爲^(五)は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取繼るを、思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つ始ぞと、顧もせで家を遁れ出で、嗟峨に至りて剃髮せりと稱す。かくて名を西行また圓位といふ。出家する時保

(一)右兵衛佐頼朝。
(二)弘法大師。

桑門

悠々自適

(三)俗名を遠藤盛遠といふ。正治元年(一一八五年)歿、年八十。

延六年にして、西行歳正に二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り西



文 覺

の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし」と。一枚の笠、一本の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺、これを惡み、弟子に告げていはく、「遁世の身ならば一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立ててここかしこに嘯きありく條、憎き法師なり。いづこにても見あひたらば頭を打割るべし」と。その後高尾の

手ぐすねを引

いひがひなの
法師どもや
面やう

涅槃

法華會に行脚の僧の参りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。誰ぞと問へば、西行と申すもの。といふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて、明障子をあけて出づ。暫しまもりて、年比承り及びたるに、御尋ね悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなることの出で來んかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、日比の仰に違ひたるは、と怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずるもの。の面やうか。文覺をこそ打た

んずるものなれ。といへりといふ。
西行深く月花を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて詠じていはく、

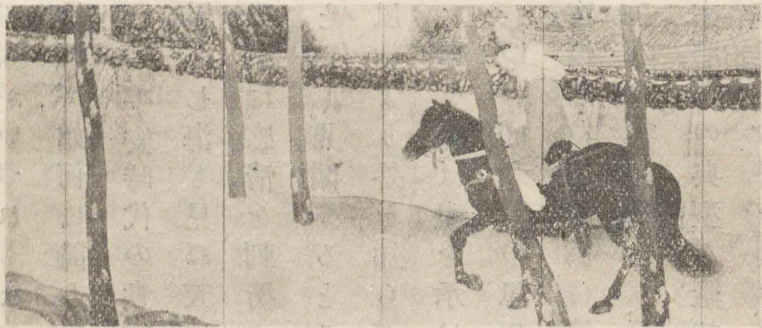
ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎのもちづきのころ

幽契違はず

(一)連歌師。花の下と號した。紀伊の人。文龜二年(一一九二)歿。年八十二。
私淑

一期を劃す



大和路の宗祇 (井澤蘇水筆)

晚年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にて入滅せり。

我が國古來詩人多しと雖も、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅かに三人。西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離のをりををも厭はず、私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。各その道に一期を劃せし

風月に放浪し
雲水に吟嘯す
吟囊を肥す

跼蹐

京洛

籛却
隱微の聲

三家がいづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行が如何に詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

抑、平安時代の貴紳淑女は、賀茂、桂、二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐し、足畿外に出でず。一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、随つて思想の發展もあることなし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて累代繼承しゆけば、和歌の思想辭句の上にも自ら典型を生じて、天真を忘れ、實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊その内容は空しく、滔々として風をなせる時、西行獨り蹶起して從來踏襲の典型を籛却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬葉の花と咲けり。平安の末

粉本

崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠ぜることの、世上一般の題詠と選を殊にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲噴々として天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。

— 國文學全集 —

六 をりふしの移り變り 吉田兼好

をりふしの移り變ること、ものごとくに哀なれ、ものの哀は秋こそまさされ。と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の氣色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやう氣色立つほどこそあれ、をりしも雨風うち續きて、あわただしく散過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ

(一)鎌倉時代の文學者歌人。正平五年(一一〇〇)歿。年六十八。徒然草はその名著。
(二)「春はたゞ花のひとへに咲くばかり」のの哀は秋ぞまさされる。拾遺集よみ人しらす。

氣色立つ

名にこそ負へ
れおほつかなき
さましたる

(一)陰曆四月八日
(二)賀茂祭、四月
の中の酉の日

水鶏のたゞく

蚊遣火
(三)月晦日の大
祓

心をみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のこ
とも立返り、こひしう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤のおぼつか
なきさましたる、すべて思ひ棄てがたきこと多し。



兼好法師

たをか。棚機祭るこそ艶かしけれ。

やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、
わさ田刈干すなど、取集めたることは秋のみぞ多かる。また野分の

灌佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに茂
りゆくほどこそ、世の哀も人のこひしさ
もまされと人の仰せられしこそ、げにさ
るものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる
頃、水鶏のたゞくなど心細からぬかは、六
月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、
蚊遣火ふすぶるも哀なり。六月ばらへま

今更にははじ
とにもあらず

あぢきなし
すさび
かいやり棄つ
べきもの

遣水

すさまじ

あしたこそをかしかけれ。いひ續くれば、皆源氏物語、枕草子などにこ
とふりにたれど、同じことまた今更
にいはじとにもあらず。思しきこと
いはぬは腹ふくる、わざなれば、筆
に任せつ、あぢきなきすさびにて、
かいやり棄つべきものなれば、人の
見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ
をさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の
散りとままりて、霜いと白う置ける
あした、遣水より烟の立つこそをか
しけれ。

年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなく哀なる。すさ



繪本徒然草よ

(一)十二月十九日
から二十一日
までの三日間
宮中でははれ
た佛事。
(二)十陵八墓に幣
帛を奉られた
使。
やんごとなし
(三)十二月晦日の
鬼やらひ。

まじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの
空こそ、心細きものなれ、御佛名荷前の使立つなどぞ、哀にやんごと
なき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝさまぞ
いみじきや。

追儼(三)より四方拜に續くこそおもしろけれ。晦の夜いたう闇きに、
松ども點して、夜半過ぐるまで、人の門たたき走りありきて、何事に
かあらん、ことごとしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさす
がに音なくなりぬること、年の名残も心細けれ。亡き人のくる夜と
て魂祭るわざは、この頃都にはなきを、東の方にはなほすることに
てありしこそ哀なりしか。かくて明けゆく空の氣色、きのふに變り
たりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立て
わたして花やかに嬉しげなるこそまた哀なれ。

——徒然草——

七 晩春の別離

島崎藤村

(一)小説家。名は
春樹。明治五
年長野縣に生
まれた。新生
飯倉だより。
藤村詩集。家。
春。嵐等の著
がある。

時は暮れゆく春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
さらに長きはなかるらん。

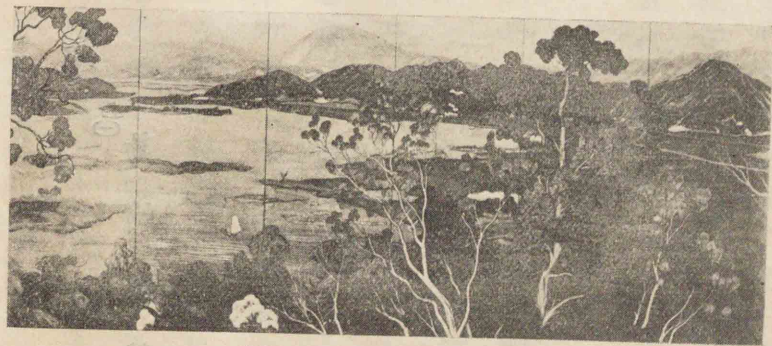
君をおくりて花ちかき
高樓たかごまでも來て見れば、
みどりにまよふ鶯は
霞むなしく鳴きかへり、
しろき光は佐保姫の

佐保姫の春の
車駕

春の車駕を照らすかな。

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて、
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし(一)膳吹(二)の山高く、
西には比叡(二)比良の峰、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏仰ぎ、
いかにすぐれし想(三)をか
沈める波にたふらん。

(一)伊吹とも書く。近江と美濃の境に聳えてゐる。海拔一三〇三メートル。
(二)近江の西部、比叡の北方に聳えてゐる。海拔八五〇メートル。
(三)近江八景の一。

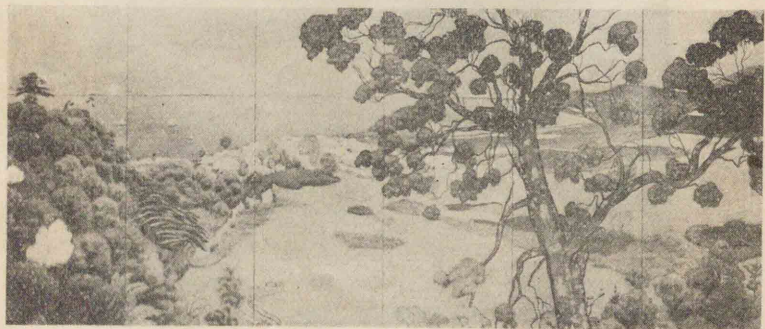


一のそ (筆村遙田池) 春残の畔湖

(一)白河法皇。

ながれはむなし(一)法皇の
夢はるかなる賀茂の水、
水にうつらふ山城の
みまびの都ゆく春の
かすめる姿見つくして、
畿内にせまる伊賀伊勢の
鈴鹿の山の波とほく
海に落つるを望む時、
いかによるづの恨をば、
空行く鷺に窮むらん。

春さり行かば、青によし
奈良の都に尋ね入り、



二のそ (筆村遙田池) 春残の畔湖

(一)阿波の東北端と淡路との間

阿波の東北端
淡路との間

としつき君がこひしたふ
御堂のうちに遊ぶ時
ふるき藝術の花の香の
伽藍の壁にのこりなば、
いかに韻を身にしめて、
深き思にしづむらん。
さては秋津の島が根の
南のつばき紀の國を
めぐりて進む黒潮の、
鳴門に落ちて行く所、
あまぎは遠く白き日の
光をもらす雲裂けて、



(筆郎八川中) 門鳴の波阿

(一)兵庫縣明石市の南海岸

(二)兵庫縣明石郡垂水の海濱と須磨と明石との中間

目にはるかなる遠海の
波のをどるを望む時
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん。
または名に負ふ歌枕
波に千とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ
松よろづよの音にひびく
舞子の濱のゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、
さ霧のうちに鳴きかよふ



(筆郎孟木子鹿) 濱の子舞

千鳥の聲を聞く時は、
 いかにも浦邊にさすらひて
 遠き昔をしのぶらん。
 げに君がため山々は
 雲を停めん、浦々は
 磯にながるゝ白波を
 あげんとすらん。よしさらば、
 旅路遙かに野邊行かば
 野邊のひめぐと、森行かば
 森のひめぐと探りもて、
 高きに登り、あめつちの
 もなかに遊び、大川の



石 明

ひめぐと

朽ちせぬ琴

ながれをきはめ、山々の
 神をもよばひ、谷々の
 鬼をもおこし、歌人の
 魂をも遠く返しつゝ、
 清しき聲をうちあげて、
 朽ちせぬ琴をかきならせ。
 さらば名残は盡きずとも、
 たもとを分つゆふまぐれ、
 見よ、影ふかき欄干に、
 けむりをふくむ藤の花。
 北行く雁はおほ空の
 霞に沈み鳴きかへり、

彩あやなす雲も愁へつゝ、
君を送るに似たりけり。

あゝ、いつかまた相逢うて
もとの契をあたゝめん。

梅も櫻も散りはてて、

すでに柳は深みどり、

人はあかねど、ゆく春を

いつまでここに留むべき。

われに惜しむな、家づとの

一枝の筆の花の色香を。

—藤村詩集—

(一)大阪高等學校
教授。奈良縣
西京の著があ
る。

(二)京都。

堂塔相呼び樓
閣相應ふ。

星霜
(三)聖武天皇時代
の藝術。

八 南 都

(一) 佐々木恒清

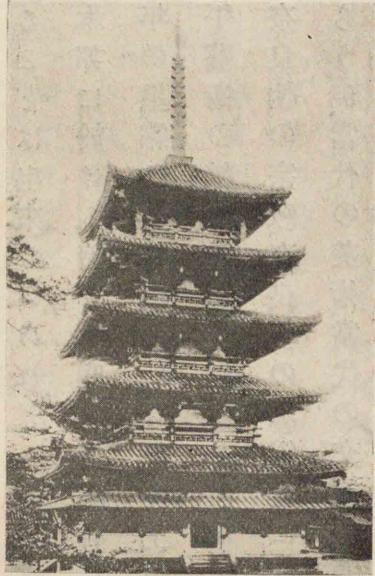
南都(二)は西京と同じく古典的情味の最も深い所である。今や平城
京址には、堂塔相呼び樓閣相應ふるといふやうな、舊時の壯觀を見
ることは出来ないけれども、紫雲常に靉黳たる法隆寺の五重塔は、
本邦に於ける隋唐文明の先驅者たる威容を表し、悠々たる千二百
年の星霜は、大佛殿のいらかの上から北和の天地を見おろして、天
平藝術の粹ここに集れりと叫んでゐるやうである。奈良朝の政治、
奈良朝の宗教、奈良朝の風俗等には、勿論幾多の缺點もあつたであ
らうが、當代の美術、當代の文學を通して見た奈良朝の精神は、實に
潑刺たる進取の元氣に満ちてゐたものであつた。萬事が積極的で、
大規模で、一般にきびきびした愉快な時代であつた。その有様は、春
から初夏にかけての氣分とでもいほうか、活々とした青葉若葉の森

(一)おもに推古天皇以後孝徳天皇頃までの約六十年間。
 (二)天武天皇時代。
 (三)白雉年中道昭が唐から傳へた宗派。

(四)天平年中唐の道璿が傳へた宗派。

蔭の、からりと晴れた空に元氣よく翻る鯉幟を見るやうで、實に男性的の趣味の溢れるやうな時代であつたのである。

まづこれを宗教の方面から觀察すれば、飛鳥時代から白鳳時代



法隆寺五重塔

にかけて盛であつた法相宗や、奈良時代に最も勢力のあつた華嚴宗などは、どちらかといへば至極樂天的な、しかも元氣に満ちた宗旨であつた。これは今日平城京址を行

脚するものの、誰しも感ずるところであつて、當時の佛寺はなるべく山地を避けて平地を選んで建てたので、當代の六宗は一に都市佛教だと呼ばれてゐる。寺を平地に建てたので、自然七堂伽藍の規則正しいものが出来た。即ち南に南大門があり、少し中へ入つて中

(Plan.)

John Ruskin. 英國に於ける近世の一大美術批評家であつて、社會改良論者。西曆一九〇〇年歿。

勁健摯實



法隆寺全景

門があり、廻廊がその中門の兩側から出て、中央の金堂を圍みながら、背後の講堂に連接する。中門外の左右には東西兩塔があり、講堂の背後左右には鐘樓、經藏が並び、最後に食堂や三面僧房を建てまはすといふやり方。左右均齊、前後照應のプラン正しく、殿樓相呼應して、ラスキンの所謂「建築は総合藝術なり」の意味を表したものである。南都の諸大寺即ち法隆寺を始め、東大寺でも、興福寺でも、藥師寺でも皆この形式を採つてゐる。單にそのプランだけを見ても、非常に自由で積極的であつて、決して陰鬱とか軟弱とかの感を起させない。更に内部の佛像を見ると、飛鳥時代のものは固拙であるが、極めて勁健摯實である。簡朴

高致

(一)東大寺の本尊である毘盧舍那佛

國幣

(二)東大寺の本堂である所謂大佛殿

高渾



金堂釋迦尊三尊

ではあるが、全く眞率平和である。奈良時代のものは圓滿最勝である。雄渾富麗である。力の美と精神の美とが最もよく合體したところに、無限な高致を現出している。どこに悲觀的な表現があるであらうか。いづれにしても、優秀な大陸文明の直輸入をやつた時代である。世界第一の巨像を鑄た時代である。十數年の歲月を費し、巨億の國幣を抛つて、三國一の大伽藍を造營したその精神を追想しただけでも、雄大な時代の精神と、典雅な趣味と、高渾な氣魄とを認めることが出来るではないか。

格調

搖籃地

上代の歌謠を集めた萬葉集や、祝詞、宣命の類を見ても、我等は潑刺たる生氣の横溢してゐるのを認める。その文辭は莊重、その格調は雄健で、それは後の平安朝や鎌倉時代のやうに弱々しい思想に囚れたり、厭世悲觀の感情を洩らしたりしたやうなものとは同一視することが出来ぬ。勿論、佛教や儒教の影響は、多少時代の國民性の上にも現れてゐるけれども、まだまだ我が國民は至極樂天的で、また極めて現代的で、しかも大國民的襟度をもつてゐた。これは美術や文學の上ばかりでなく、社會萬般の事がらに於ても、十分認めることが出来るのである。

我が國上古より奈良朝までの歴史は、飛鳥から奈良へかけての約五六里四方を舞臺として演ぜられたのである。建國以來千二百年間の我が國體の基礎、我が民族の發展、我が文明の成立等は、皆この小舞臺に演ぜられた所作事であつた。この我が文明の搖籃地も、

(一)太宰少貳小野
老朝臣の歌。
(二)玉葉集所載、
よみ人しらす。

平安遷都以後は遠く政治の圏外に捨てられたので、曾ては萬葉の歌人をして、青(一)によし奈良の都は咲く花の、匂ふが如く今盛なり」と讚美せしめたものが、その後幾年も経たぬ間に、世の中は常なきものと今ぞ知る、奈良の都のうつろふ見れば、と歎ぜしめるほどに衰頽したけれども、當時のきびきびした氣魄の大きい快活な面影は、到る所に於てしのぶことが出来るのである。

要するに、南都は秋よりも春の氣分を表した都である。夕暮より夜にかけての都といふよりも、朝から晝にかけての都である。紫や緋のやうな女性的の色ではなくて、緑若しくは朱のやうな男性的の色の都である。しとしとと降る時雨ではなくて、沛然として至る驟雨である。涙に満ちた悲劇ではなくて、楽しいお伽噺である。

—南都と西京—

九 小松内府 その一

(一)太政大臣平清盛、入道して淨海といつた。

神拜

(二)筑後守平貞能、清盛の腹心。

(三)清盛の叔父忠正。
(四)崇徳上皇。
(五)重仁親王。
(六)清盛の父忠盛。
(七)鳥羽法皇。

太政入道は、かやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲絨の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝ、しうぞ見えし、貞能(二)と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋絨の鎧着て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、このこといかと思ふぞ。保元(三)に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一宮の御事は、故刑部の卿殿の養君にてましまししかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠(四)に任せて、御方にて先を驅

(一) 一八一九年
 (二) 藤原信賴
 (三) 後白河上皇
 (四) 大内即ち二條天皇
 (五) 藤原經宗
 (六) 藤原惟方

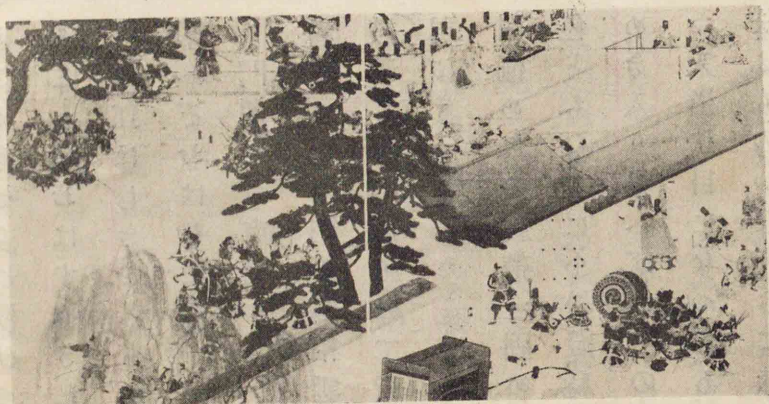
(七) 藤原成親
 (八) 藤原師光
 (入道して西光と
 いった)

讒奏

(九) 後白河法皇

けたりき。これ一つの奉公次に平治元年十二月、信賴、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛むるに至るまで、君の御爲にすでに命を失はんとすることたびたびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方

(一) 平重盛の邸



(二) 鳥羽、後白河
 兩法皇の離宮
 今の京都市下
 京區三十三間
 堂の東南

は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。とこそ宣ひければ、主馬の判官盛國急ぎ小松殿へ馳参つて、世は早かう候。と申しければ、大臣聞きもあへ給はず。嗚呼、はや成親卿の首の勿雲ねられたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召され候ふ上は、侍どもも皆うち立つて、たゞ今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせん

〔清盛の邸〕

とこそ議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何によつてたゞ今さることのおはすべきとは思はれけれども、けさの禪門の氣色、さるもの狂ほしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

直衣
さやめく

門前にて車よりおり、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各いろいろの直垂に思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外諸國の受領衛府諸司などは縁にゐれば、庭にもひしと並みゐたり。旗竿など引側め、引側め、馬の腹帯を固め、冑の緒を締め、たゞ今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、ことの外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするやうにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながら

五戒
五常

面はゆう

も、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向かはんこと、さすが面はゆう耻づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上に素絹の衣を、あわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

一〇 小松内府 その二

や、あつて入道宣ひけるは、あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、は

邊地粟散の境



平重盛

らはらとぞ泣かれける。入道^りさていかにや、いかに。とあきれ給へば、
 やゝあつて大臣涙をおさへて、この仰承り候ふに、御運は早末にな
 りぬと覚え候。人運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候ふな
 り。また御有様を見参らせ候ふに、更に現^まと
 も覺えず。さすが我が朝は邊地粟散の境と
 は申しながら、天照大神の御子孫、國の主と
 して、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給
 ひしよりこの方、太政大臣の官に至る人の
 甲冑をよろふこと、禮儀を背くにあらずや。
 就中御出家の御身なり、法衣を脱捨てて忽ちに甲冑をよろひ、弓箭
 を帶しましまさんこと、内には破戒無慚の罪を招くのみならず、外
 には仁義禮智信の法にも背き候ひなんぞ。かたがた恐ある申し事
 にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。

破戒無慚

(一)伯夷と叔齊

進止

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。
 その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王土にあらずといふこと
 なし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、
 勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに況んや、先祖に
 も未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗
 の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領とな
 つて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ
 等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇
 を傾け参らせ給はんこと、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給
 ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。
 この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは無雙
 の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れ
 ども當家の運命未だ盡きざるによつて、事すでに露れ候ひぬ。その

佛陀の冥慮

上仰せあはせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公の忠勤をつくし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思し召し直すことなどか候はざるべき。

一入再入

これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し参らせ候ふべし。その故は、重盛はじめ叙爵より今大臣大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆、萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候ふべし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不

孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣となりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運のつきんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細うこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候ふべき。たゞ末代に生をうけて、かかる憂目に逢ひ候ふ重盛が果報のほどこそ拙う候へ。たゞ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易きほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。して、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめざめと泣き給へば、その座に並み給へる平家一門の人々、皆袖をぞ

ひがごと

濡されける。入道頼みきつたる内府のかやうに宣へば、世にも力なげにて、いや、それまでのことは思ひも寄り候はず。悪黨どもの申すことに君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出で來んずらんと思ふばかりでこそ候へ。大臣たどひいかなるひがごと出で來候へばとて、君をば何とかし参らせ給ふべき。とて、つい立つて中門に出で、侍どもに宣ひけるは、たゞ今これにて申しつることどもをば、汝等はよく承らずや。けさよりこれに候ひて、かやうのことどもを申ししづめんとは存じつれども、餘りにひたさわざに見えつる間、まづ歸りつるなり。院参の御供に於ては、重盛が頭の刎ねられたらんを見て仕れ。されば人参れ。とて、小松殿へぞ歸られける。

その後大臣、主馬の判官盛國を召して、重盛こそけさより別して天下の大事を聞き出したんなれ。われをわれと思はんずるものど

ひたさはぎ

もは、物の具して急ぎ参れと催せ。と宣へば、馳せまはつて披露す。おぼろげにては騒ぎ給はぬ人の、かやうの披露のあるは、まことに別の仔細のあるにこそとて、われもわれもと馳参る。都の内外にあふれわたる兵ども、あるは鎧着て未だ冑を着ぬもあり。あるは矢負うて未だ弓を持たぬもあり。片鎧ふむやふまずにて、あわて騒いで馳参る。

小松殿に騒ぐことありと聞えしかば、西八條に數千騎ありける兵ども、入道にはかうとも申しも入れず、さやめきつれて、皆小松殿へぞ馳せたりける。弓箭にたづさはるほどのものは一人も残らず。筑後の守貞能がたゞ一人候ひけるを、御前へ召して、内府は何と思ひて、これ等をば皆かやうに呼取るやらん。けさこれにていひつるやうに、淨海が許へ討手などもや向けんずらん。と宣へば、貞能涙をばらはらと流して、人も人にこそよらせ給ひ候へ。いかでかたゞ今

さる御事候ふべき。けさこれにて申させ給ひつる御事どもをば、はや皆御後悔ぞ候ふらん。と申しければ、入道内府に中たがうては悪しかりなんとや思はれけん、法皇迎へ参らせんと思はれける心も和ぎ、急ぎ腹巻ぬぎ置き、素絹の衣に袈裟うちかけて、いと心にも起らぬ念誦してこそおはしけれ。

—平家物語—

一一 平家物語論

(一) 五十嵐 力

長き平安朝の公卿文明は、一旦清盛に滅されたが、その亡魂は平家に魅入つて辛うじて蘇り、再び二十年の果敢ない華やかな夢を見た。奢る平家は、かくて藤原氏に得たる所によつて滅び、世になし源氏は、その平家の失ひたるものを得て興つた。この二者得喪の關係を骨として、平家の榮華没落の樂しき、悲しきを寫したものが平家物語である。平家が歴史の表舞臺を占めた保元より壽永までの

(一) 國文學者。文學博士。早稲田大學教授。形田治七年生。新文章講話。新國文學史。甲鳥園筆。國歌の胎生及び發達の著がある。

(二) 後白河天皇より安徳天皇までの御代(一一八四—一一三三年)。

(一) 秦の侯臣。始皇帝の死後、權を專らした。三世皇帝の時死す。
(二) 漢の逆臣。前漢の帝位を奪つて國を新と號したが、後漢劉秀に亡ぼされた。在位十五年。
(三) 唐の反將。玄宗皇帝に仕へて、天慶の大亂を起した。大西曆七五七年歿。

三十年間、——この三十年間に於ける空前絶後ともいふべき平家の榮華と没落とは、如何にこの物語に描かれたか。

まづ序幕は、祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の意をあらはす。驕れる者久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き者も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。といふ物悲しげな、面の華やかさを哀愁の情調で裏打ちしたやうな、口調文體、趣味すべての點に於て、平家一篇の代表と見える文句を以て始めてある。ここへ漢土の趙高、王莽、安祿山、本朝の將門、純友等を前驅として堂々と現れ出たのが、六波羅の入道、前の太政大臣、平の朝臣清盛で、所謂心も言葉も及ばぬ彼の驕奢横暴が、まづ小氣味よく描かれてある。彼は本來、殿上の交をだに嫌はれた者の子である。かの西光が彼を罵つて、抑、御邊は、故刑部の卿忠盛の嫡子にておほせしが、十四五までは出仕もし給はず、故中御門の藤中納言家成卿の

邊に立入り給ひしをば、京童は、例の高平太とこそいひしか。といつた通り、はかなき中納言家に立入るをすら面目としたほどの身分であつたが、それが運命の後押しで、一躍して太政大臣となつた。世に清盛ほどの幸運者はない。

彼には、格別の武略がある譯ではない。保元には爲朝の鋭鋒を避けて弱敵に向かひ、平治には兜を後向にかぶつたほどの慌て者でありながら、不思議に吉事のみ打續いて、身は臺閣の高きに上つたのみならず、彼の悪運の強さは、五十一歳の時大病に罹つて、存命の爲に出家したが、それと共に病は立ちどころに癒えて、天命を全うした。而してその病癒えて後の彼の半生は、殆ど横紙破りの我儘に費されたのである。

治に居て亂を忘るゝは人の常である。まして、いふことは皆行はれ、なすことは悉く従はれるといふ彼の世盛りの段になれば、もは

樞要の顯職

や武を練る必要がない。かゝる時に、必然に人心を壓して起るものは、遊惰安逸の慾である。ここに於て、感情、文藝を主とした平安朝の公卿文明は、今や赫灼の光を放つて彼等の眼に映じた。彼等は甲冑を脱して綾羅錦繡を身に纏うた。烏帽子のためやう、衣紋のかきやうに風雅を競ふこととなつた。かくて朝廷樞要の顯職、多くは平族の占むるところとなり、一門の公卿十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領、衛府、諸司都合六十餘人の多きに至つた。その外、清盛の女八人、皆とりどりに榮え、或は召されて女御となり、或は后に立つて國母として院號を蒙らせらるゝに至つた。

然しながら、この威勢も、得意も、驕奢も、皆一場の夢であつた。公卿のもつ宮廷文明が見るまに彼等を軟化し、やがて平家の一門は、政治を知らぬ大臣、納言も、武事に習はぬ大將中將戦争を忘れて主人の奢侈風流の手助をする家子、郎黨とを以て満たされた。かくして

(一)平經正が恩賜の琵琶を仁和寺法親王の宮にお返し申したことをいふ。
 (二)平忠度が藤原俊成を訪ふたこと。
 (三)清盛の子、武勇の名高く、文治元年(一〇八四)年(一)浦の戦に奮死した。年三十。
 (四)清盛の弟、平治の亂で名をあげ、壽永四年(一一八三)年(二)自殺した。年五十七。
 (五)教盛の子、能登守。擡ノ浦の戦に義經と一騎打ちをやつた。
 (六)治承四年(一一八四)年(三)平維盛が頼朝を討つて、富士川で破れたこと。

味方とは離れ、合戦の期には違つても手すさびの樂器は失ふまいとする貴公子を生じた。一門の運命の爲に自重すべき可惜(あたら)身命(しんみこと)を、甘んじて歌友達の訪問に賭する武將を生じた。一門の氣風のかくなる上は、知盛、教盛、教經、景清等二三の除外例者の憤激ももう及ばぬ。かくして、一世を聳動した平家の榮華は、重盛の哀死、清盛の憤死を境とし、富士川水禽の羽音を轉機としてまぼろしの如くに消え、一門の運命は急轉直下、都を追はれ一ノ谷を追はれて、やがて西海の波と消えた。蓋し重盛の聰明盛徳もその家運の維持に寸效がなかつたのみならず、彼も武力養成の必要には全く著眼せず、一門の文弱を矯めようとする考はなかつたのである。否、彼みづから富貴榮華、朝恩、重職を極めることを無上の榮譽としてよるこんだのである。賢明なる彼も、つまりは時代の波に漂つた一人で、聰明忠誠なる君子人の彼の苦心が、たまたま平家の滅亡を早くする原因となつたのも、不測の天意を暗示して、この物語に一層の哀さを添へてゐる。

脊梁

(一)京都の白拍子、清盛に召されて西八條の邸にゐた。後出年二十一。
 (二)成親等と平氏を亡さんとし、承元年(一一七五)年(三)鬼界島に流され、翌年(一一七六)年(四)死す。年十七。
 (五)ねび

この平家の一門の榮枯の華々しい、目ざましい激變は、平家物語の脊梁をなして、この物語に稀有の興味と情調を與へてゐるが、その間には、更に平家の運命を壓縮したやうな幾多の哀な挿話があつて、本筋を引立たせてゐる。祇王も、西光も、成親も、俊寛も、義仲も、判官義經も皆その小縮圖であつて、平家は、これ等を基礎とし、背景とし、添景として、更に大規模に人生の悲哀を歌つたものである。而して、これ等の小話を踏まへて、平家物語の描き出した悲哀の最高調は、實に二位の尼、主上を抱いて入水する一節にある。今年は八歳にぞならせおはします。御年のほどよりは遙かにねびさせ給ひて、御かたちいづくしう、あたりも輝くばかりなり。御髮黒うゆらゆらと御脊中過ぎさせ給へる主上をすかし參らせて、この國は粟散邊

分段

土と申して、物憂き境にて候。あの波の下にこそ、極樂淨土とてめでたき都の候へ。それへ具しまゐらせ候」と、様々に慰めまゐらせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小さう美しき御手を合はせ、まづ東に向かはせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮に御暇申させおはし、その後西に向かはせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿、やがて抱き参らせて、波の底にも都の候ぞ」と、慰め参らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。悲しきかなや無常の春の風、忽ちに花の御姿を散し、いたまじきかな、分段の荒き波、玉體を沈め奉る」と。何等の哀音ぞ。厭はせ給ふ幼帝を、いろいろにこしらへ慰め参らせて、抱き奉りて海中に躍り入る。千尋の底に沈み給ふ。の一句、王者の音もなく沈みゆかる、御有様を、まのあたり見奉る如くである。海底に達せられた刹那、地底天上より世を壓して殷々と響き始めた哀歌は、悲しきかなや、無情の春の風、以下の數句で、この哀歌と共に、

平家と平安朝の舊文明とは永久に亡び去つた、祇園精舎の鐘の聲、序曲は、層々歩を進めて、ここに最高調に達し、而してこの哀絶の物語は、この最後の調子を一層悲壯にせんが爲に、ここに神璽と寶劍と幼帝とを奪ひ去つたのである。我が國古來、未だ曾てこの如き悲壯の曲はない。而してこの最高調の哀歌は長く尾を曳いて、大原御幸にその餘韻を收めてゐるのである。

見よ、たゞ一人、大原の奥に世をのがれて、昔はまづ東に向かはせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮、伏し拜ませおはし、天子寶算千秋萬歳とこそ祈り申させ給ひしに、今は引きかへて、西に向かはせ給ひて過去精靈必ず一佛土へと祈らせ給ふ。哀れふかき女院の御庵室の御障子に遊ばされた御歌を。

この頃はいつならひてかわが心

大宮人のこひしかるらん

天上の樂みも地獄の苦みも、今は回顧の眼に靜かに寂しく映るやうになつた。この時に至つても、ぞろに戀しきは大宮人の生活である。もとは武人の女たる御身の、いつならひてか、宮廷の公卿生活の戀しくなつたことであらう。哀れ、女院の御心は平家一門の心であつた。彼等は、いつしか公卿の生活に中毒して、甘んじてその犠牲となり、死に至るまで公卿生活の甘き夢に憧れてゐた。平家の歴史は淋しいけれども、甘い悲痛だけれども、醉心地の歴史である。稀有の悲劇だけれども、恍惚として夢心地に味はひ得る悲劇である。而してこの悲劇の樞要部を占めて、壯快なる前曲を奏でたのが清盛、結尾の哀音を奏でたのが清盛の妻二位の局、而して最後にこの哀音の餘韻の搖曳を奏でて、その作に干鈞の寂しき落着を與へたのが清盛の女なる女院である。新國文學史

自修文

俊 寛

菊池 寛

(一)小説家。明治二十二年香川縣に生れた。作品は父歸郷の彼方、恩讐の心鳥、眞珠夫人等、その全集十二巻に收められてゐる。

疼痛
こと。みうづく
礮礮
石の多い、や
さした土地。

船は俊寛の苦悶などには何の容赦もなく、半刻も経たないうちに水平線に漂ふ白雲のうちに紛れ込んでしまつた。船の姿を見失うた時、俊寛は絶望の爲に昏倒した。昨夜來叫び續けた疲労が一時に發したのだらう、その儘ぼうつとして眠り續けた。

彼は巖壁の上で昏倒した儘、何時間眠つてゐたかは自分にもわからなかつた。一度目覺めた時は夜だつた。彼は自分の頭の上の上空が大半暗い雲に掩はれ、その僅かな切目から二三の星が瞬いてゐるのを見た。彼は激しい渴と全身を碎くやうな疼痛を感じた。

彼は水を飲みたいと思ひながら周圍を見廻した。が、巖壁の背後はすぐ礮礮な山になつてゐるらしく、小川とか泉とかがありさうにも思へなかつた。それでも激しい渴は彼を一刻もじつとしてゐさせなかつた。彼は寝てゐた岩から身を剥がすやうにして立上つた。立上る時、身體の諸々の關節が音を立てて軋る

榕樹
桑科の常緑樹
我が國では臺
海地方に産す
る。高さ四五
丈。

やうに思はれた。彼はそれでも這ふやうにして巖壁を下ることが出来た。彼は、
晝間——それは昨日であるのか一昨日であるのかわからなかつたが——夢中で
走つた道を二町ばかり引返した。彼は晝間そこを走つた時、榕樹が五六本生え
てゐて、その根に危く躓きさうになつたのを覚えてゐた。彼の濁つてしまつて
ゐる頭の中にも、榕樹の周囲を探せば水があるかも知れないといふ考がぼんや
り浮かんであつた。

が、榕樹の生えてゐる周囲を海の水明りで二三度探して廻つて見たけれども、
そこには一面に唐竹が密生してゐるだけで、水らしいものは少しも見當らない。
俊寛はその搜索に残つてゐた精力を使ひ盡くして、崩れるやうに地上へ横たは
ると、再び昏々として眠り始めた。

二度目に目が覺めた時、それは朝だつた。疲れ萎びてゐる俊寛の頬にも、朝
風は快かつた。彼が目を開くと、自分の身體の上に茂り重なつてゐる蒼々たる
榕樹の梢を洩れる清々しい朝の日光が、美しい幾條の縞となつて、自分の身體
に注いでゐるのを見た。さすがに暫くの間は淨らかな氣持がした。が、すぐ二

縹渺
ひろびろとし
たさま。

群青色
青白色。

(一)南海に住む、
や、大形の白
色の海鳥

(二)藤原成經。成

親の子。丹羽

建仁二年(一

八六二年)歿

(三)平康頼。平判

官ともいふ。

瞋恚
極めて強い
きどほり。

三日來の出來事が悪夢のやうに歸つて來、そして激しい渴を感じたので、彼は
よろよると立上つた。それでも縹渺と無邊際に擴がつてゐる海を、未練にもも
う一度見直さずにはゐられなかつた。が、群青色に遙々と續いてゐる大洋の上
には、信天翁の一群が飛交うてゐる外は何物も見えない。成經や康頼を乗せた
船が、今まで視野の中に止まつてゐる筈はなかつた。

彼が再び地上に身を投げた時、身を焼くやうな渴と餓とが激しく身に迫つて
來た。彼は赦免の船が來て以來何も食つてゐないのだつた。基康はさすがに彼
を憐れがつて、船の中で炊いた飯を持つて來て呉れたのであるが、瞋恚の火に
心を焦してゐた俊寛は、その久振りの珍味にも目をくれないで、水夫の手から
それを地上に叩き落した。無論今でも自分の小屋まで歸れば乾飯も澤山残つて
ゐる。が、俊寛には一里に近い道を歩く勇氣などは残つてゐなかつた。

激しい渴と餓とは彼の心を荒ませ、自殺の心を起させた。彼は目の前の海に
身を投げることを考へた。さうして、何故基康の船があるうちに死ななかつた
かを後悔した。基康やあの裏切者の成經や康頼の目前で死んだならば、少しは

腹癒せ
いかり、うら
みをはらすこ
と。
歸洛
京都に歸るこ
と。

腹癒せにもなるのだつたと思つた。今死んでは犬死であると思つた。が、死なうといふ心は變らなかつた。歸洛の望を永久に断たれながら暮らしてゆくことは、彼には堪へられなかつた。二十間ばかり向うの岸に一つの岩があり、その下の水が殊更に深いやうに見えた。彼が決心をして立上つた時、彼はふと水の匂を嗅いだ。それは眞水の匂だつた。極度に渴してゐる彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつてゐるのだつた。彼は水の匂を嗅ぐとその方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を彼は獸のやうに潜つた。十間ばかり潜つた時その林がつきて、そこから岩山が聳えてゐた。ふと、そこに、大きい岩を背後にして、この島には珍しい椰子の木が十本ばかり生えてゐるのを見た。そして、その椰子に掩はれた蒼色の岩から、一條の水が銀の糸のやうに滴つて、それが椰子の根本で、小さい泉になつてゐるのを見た。水は浅いながら澄切つて、沈んでゐる木の葉さへ一々數へられた。渴し切つてゐる俊寛は、犬のやうにつくばつて、その冷たい水を思ひきりがぶがぶ飲とんだ。それが何といふ快さであつたらう。それは彼が鹿が谷(1)の山莊で

(一)京都東山の麓。

清冽
水の清くつめ
たいこと。

飲んだ如何なる美酒にも勝つてゐた。彼がその清冽な水を味はつてゐる間は、清盛に對する怨も、島にたゞ一人残された悲みも忘れ果てたやうに、清々しい氣持だつた。彼は蘇つたやうな氣持になつて立上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい實が二つばかり生つてゐるのを見た俊寛は疲勞を忘れて、猿のやうに攀登つた。それを叩き落すと、傍の岩で打碎き、思ふさま貪り食つた。

彼は生まれて以來、これほどの有難さとこれほどの甘さまで飲食したことはなかつた。彼は椰子の實の汁を吸つてゐると、自分の今までの生活が夢のやうに淡く薄れてゆくのを感じた。清盛平家の一門、丹波少將、平判官、丹左衛門尉そんな名前や、そんな名前に對する自分の感情が、この口の中のすべてを、否、心の中のすべてを溶かしてしまふやうな木の實の味に比べて、全く空虚な、つまらないものやうな氣がし始めた。

俊寛は口の中に残る快い感覺を楽しみながら、泉の畔の青草の上に寝た。そして、過去の自分の生活の色々な相を心の中に想ひ出して見た。都に於ける色

(一)成經のこと。
(二)康頼のこと。

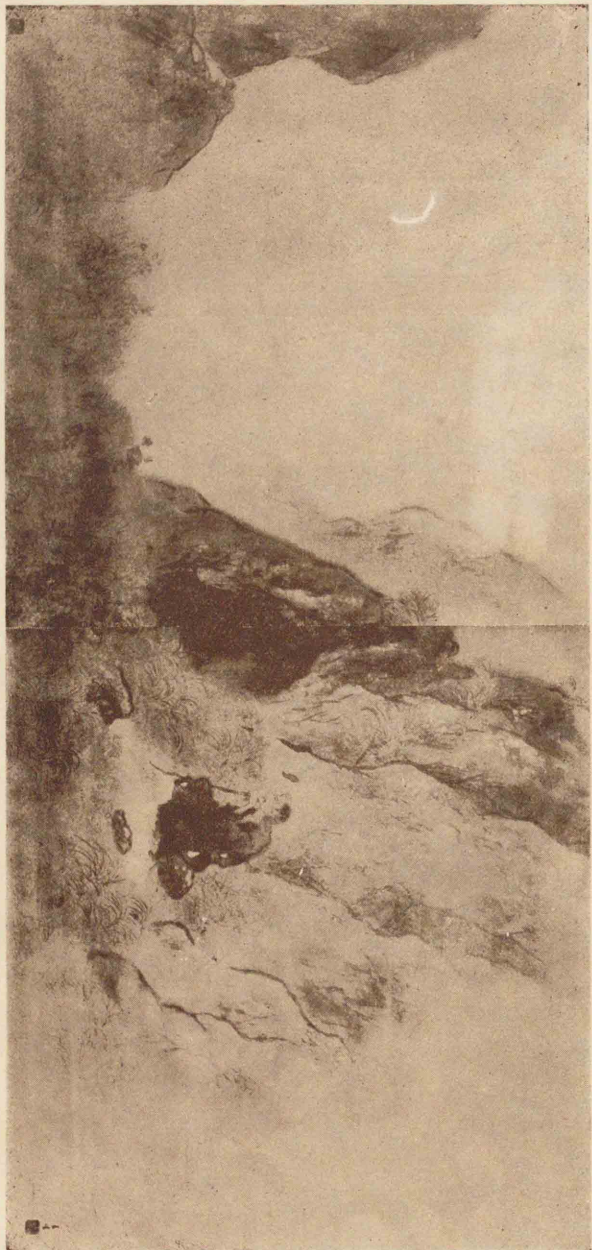
陥擠おとしいれる
こと。

(一)鬼界島第一の
高山。

真如の生活
すべてをなや
みわづらひ
をわすれた清
らかな生活

色な暗闘、陥擠、戦争、権勢の争奪それからくる嫉妬、反感、憎悪さういふ感情の動く儘に狂奔してゐた自分の淺ましさがいみじみ解つたやうな気がした。船を追つて狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうに淺ましい気がした。煩惱を起す種のないこの絶海の孤島こそ、自分に取つて唯一の淨土ではあるまいか。康頼や成経が傍にゐた爲に、都の生活に對する、否、人生に對する執着が切れなかつたのだ。この島を假の住所と思へばこそ、硫黄が岳に立つ煙さへ、焦熱地獄に續くもののやうに、懶く思はれたのだ。こここそは、つひの住所だ、あらゆる煩惱と執着とを斷つて、真如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと俊寛は生まれ變つたやうな朗かな氣持がした。

ふと寝返りを打つと、すぐ自分の鼻の上に、撫子に似た真赤な花が咲いてゐる。それは都人の彼には名も知れない花だつた。が、その花の真紅の花瓣が何といふ美しさと淨らかさをもつてゐたことだらう。その花をじつと見つめてゐると、人間のすべてから知られないで美しく薫つてゐる、かうした名も知れない花の生活といったやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分



筆 俊 春 山 高

鳥 孤

むげに
この上なく、

踴躍
おどろあがる。

の生活でさへ、むげに生甲斐のないものだとは思はれなくなつた。彼は自殺しようとした自分の心の淺はかさを恥ぢた。彼の心には今新しい力が沸いた。彼は踴躍して立上つた。そして、海岸へ走り出た。平素は魂も眩むやうに懶く思はれた大洋が、如何に美しく輝いてゐたことだらう。十分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が後から後からと湧くやうに躍つてゐた。海に接してゐる砂濱は金色に輝き、飛交うてゐる信天翁の翼からは銀の光を發するかと疑はれ、平素は見ることを厭つてゐた硫黄が岳に立つ煙さへ、今朝は澄みわたつた朝空に琥珀色に優にやさしくたなびいてゐる。俊寛は童のやうな伸びやかな心になりながら、兩手を差擴げ、童のやうに叫びながら、自分の小屋へ馳戻つた。島に來て以來一年の間、俊寛の生活は、成經や康頼と昔物語から謀反の話をして、おしまひには、お互の境遇を歎き合ふか、でなければ、砂丘の上などに昇りながら、浪路遙かな都を偲んで溜息を吐きながら、一日を茫然と過してしまふのだつたが、俊寛はさうした生活を根本から改めようと決心した。彼は努めて都のことを考へまいとした。随つて、成經や康頼のことを考へま

(平教盛)

いとしたり。彼は成経や康頼が深切に残して置いてくれた狩衣や指貫さしぬきを海中へ投捨てた。長い生活の間には、衣類に困るのは分り切つてゐた。が、困つたら、土人のやうに木の皮を身に纏うても差支はないと考へた。

その上、三人でゐた間は、肥前國加瀬の莊にある成経の舅からの、平家の眼を忍んでの仕送りで、細々ながら朝夕の食にことを缺かなかつた。その爲でもあるが三人は大宮人の習慣を持續けて、なすこともなく毎日暮らしてゐた。俊寛はさうした生活を改め、自分で漁し、自分で獵し、自分で耕すことを考へた。彼はさういふ生活に入る第一歩として、成経や康頼の記憶が附纏つてゐる今までの小屋を焼捨て、自分で發見したあの泉の畔に新しい家を自分で建てることを考へた。

四半刻
今の時間でお
よそ三十分位

彼はその日から泉に近い山林へ入つて樹を伐つた。彼が持つてゐる道具は、一挺の小さい鉞まさかりと二本の小太刀だつた。周圍一尺もある樹は、伐倒すのに四半刻近くかゝつた。が、彼の額に汗を流しながらその幹に鉞を打込む時彼は名状しがたい壯快な氣持がする。清盛に對する怨などは、さうした瞬間、泡のやう

會心の微笑
心になつた
よるこびのわ
らひ。

に彼の頭から消去つてゐる。そしてその樹が鉞の幾落下かに依つて力が盡き地を揺がせて倒れる時、俊寛の焼けた顔には會心の微笑が浮かぶ。彼はさうして伐倒した樹の枝を拂ひ、一本宛やつとの思で泉の畔へ引いてくる。彼はその粗い丸太を地面に立てて柱とした。小太刀や鉞で穴を掘ることは可なり骨が折れた。殊にさういふ仕事に用ひることで、これから先の生活にどんなに必要であるかも知れない道具の破損することを恐れねばならなかつた。屋根は唐竹で葺いた。この島の大部分を掩うてゐる唐竹は屋根を葺くのには藁よりも遙かに優れてゐた。樹の枝を横に幾つも並べて壁にした。そして、近所から粘い土を見出して、その上から塗抹ました。彼は自分の住む家を自分で建てることとどんなに樂しみな仕事であるかが分つた。その間、清盛に對する怨や、妻子に對する戀しさ、焼くやうに胸に迫ることがある。そんな時、彼は常よりも二倍も三倍も激しく働く。無論、島に夕暮が來て、日が荒寥たる硫黄が岳の彼方に落ち、唐竹の林に風が騒ぎ、名も知れない海鳥が鳴く時など、燈もない小屋の中に蹲つてゐる俊寛に、身を裂くやうな寂しさが襲つてくる。が、晝間の激しい勞動

塗抹
ぬりつけるこ
と。

荒寥
あははててと
びしいさま。

が産む疲労は、すぐ彼をさうした寂しさから救つてくれ、そして、彼に安らかな眠を與へてくれる。

新しい小屋が出来た時、その次に、彼は食物のことを考へた。三人で食残した乾飯は、まだ二月三月は俊寛一人を支へることが出来る。が、成経がゐなくなつた今は、成経の舅から仕送りがある筈はなかつた。今は自分で食物を耕し作るより外はなかつた。俊寛は、新しい小屋から二町ばかり隔つた所に、やや闊けた土地があり、硫黄が岳に遠い爲に硫黄の氣が少しもないことを知つた。彼はそこを冬の間を開墾し、春がくれば麥を植ゑようと思つた。が、差當つては、漁と獵をする外に食料を得る道はなかつた。

彼は堅牢な唐竹を伐つて、それに蔓を張つて弓にした。矢は細身の唐竹を用ひ、矢尻は鋭い魚骨を用ひた。本土ならばかうした矢先にかかる鳥は一羽もゐなかつただらうが、この島に住んでゐる里鳩、唐鳩、赤髯、青鷺などは、俊寛の近付くのを少しも恐れなかつた。半日山や海岸を驅廻ると、運び切れないほどの獲物があつた。

(一)大隅國 永良島の近海に多く産する海蛇の一種。

今までの彼は、獵はともかく、漁はむげに卑しいことであると思つてゐた。ひたすらに都會生活に憧れてゐた彼はさうしたことを眞似て見ようといふ氣は起らなかつた。が、現在の彼は土人に倣つて漁をして見ようと考へた。その頃の島は鰻を取る季節だつた。永良部鰻は、秋から冬にかけて、島の海岸の暖い海水を慕つて來て、そこへ卵を産むのだつた。土人は海水の中に身を浸して、それを手捕りにした。俊寛もそれに倣つた。最初は幾度擱んでも掴み損ねた。土人は怪しい言葉で何かいひながら俊寛を嗤つた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも根よく續けて、試みてゐるうちに、魯鈍で一番不幸な鰻が俊寛の手にかゝる。五日と經ち七日と經つうちに、どんな敏捷な鰻でも俊寛の手から逃れることが出来なくなつてくる。彼は何十疋と獲た鰻の鰓に蔓を通し、それを肩に擔ぐ。蔓が肩に喰入るやうに重い。が、自分で捕つたのであると思ふと、一疋だつて捨てる氣はしない。小屋へ歸つてから、彼は小太刀で腹を割き腸を去つてから、それを日向に乾す。半月ばかり鰻を捕つてゐるうちに、小屋の周圍は乾いた鰻で一杯になる。そのうちに、鰻の捕れる季節は過去つてしまふ。

廣闊
ひろびろとし
たさま

精根
心神の元氣

(一)京都府紀伊郡
素絹
白い生絹

そして冬が来た。冬の間、俊寛は畑を作ることに一所懸命になつた。彼はまづ畑の爲に選定した彼の廣闊な土地へ火を放つた。そして、雑草や灌木を焼拂つた。それから、焼残つた木の根を掘返し、岩や小石を取去つた。彼の鍬は今度は鍬の用をした。土人の所に行けば、鍬に似たものがあるのを知つてゐた。が、報酬なしに土人が何物をも貸さないことを知つてゐた。道具のない爲に彼の仕事は捗らなかつた。が、彼の精根はさうしたものにすべて打克つた。冬の終る頃には、一町近い畑が彼の力に依つて拓かれた。彼に今最も必要なものは、そこに蒔かねばならぬ麥の種だつた。彼は麥の種を土人が手放さないのを知つてゐた。彼はそれを交易する爲に、自分の持物のうちで土人の欲しがりさうなものを色々考へて見た。然し、それは自分の生活にも缺くべからざるものだつた。俊寛はふと、鳥羽で別れる時、妻の松の前から形見に贈られた素絹の小袖を今もなほその儘に持つてゐるのに氣が付いた。それは現在の彼に取つて過去の生活に對する唯一の記念物だつた。彼は一晚考へた末、この過去の生活に對する記念物を現在の生活の必須品に換へることに決心した。彼はいとしい妻の形見

を一袋の麥に換へた。そして、それを彼が自分で拓いた土地に蒔いた。

自分で拓いた土地に自分の手で蒔いた種の生えるのを見ることは、人間の喜びの中では一番素晴らしいものであることを俊寛は悟つた。仄かな麥の芽が確な地殻から頭を擡げるのを見た時、俊寛は嬉し涙に咽んだ。彼は跪いて目に見えぬ何物かに心からの感謝を捧げたかつた。

鬼界が島にも春は廻つてくる。島の周圍の海が薄紫に輝き始める。そして、全島には椿の花が一面に咲く。信天翁が一日一日多くなつて、硫黄が島の中腹には雪が降つたやうに集つてゐる。

生まれて初めての自然生活は、俊寛を見違へるやうな立派な體格にした。生白かつた頬は茶褐色に焼けて輝いた。去年中着續けてゐた僧侶の平服は、色々のことをするのに不便なので、思ひ切つてそれを脱捨てて、皮かづらを身に纏つた。生年三十四歳、その壯年の肉體には、原始人らしいすべての活力が現れ出した。彼は生え伸びた髪を無雜作に蔓で束ねた。六尺豊かの身體は鬼のやうな土人と比べてさへ一際立勝つて見えた。

彼は時々自分の顔を水鏡で映して見る。が、その變り果てた姿を淺ましいな
どと思つたことはない。無論現在の彼には、妻子が時々思ひ出されるだけで、
清盛のことなどは念頭になかつた。平家が千里の彼方で奢つてゐるが、
が、そんなことはどうでもよかつた。それよりも彼は自分が植付けた麥の成長
するのが一日千秋の思で待たれた。

——菊池寛全集——

一一二 川柳點

金子元臣(一)

(一)國文學者。御
歌所寄人。國
學院大學教授
明治元年東京
に生れた。
古今集評釋。
枕ノ草子評釋
等の著がある。
諷刺
おとがひを解
く
突梯
應接に違あら
す
寸にして珍

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷れ、近づくもの皆傷
つく。語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽お
とがひを解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變
萬化、人をして應接に違あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきに
しもあらねど、要するに、寸にして珍なるものなり。いで左にその二
三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に来て、御慶帳の記名に困り、さらばこぬ分にして下
され。といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を
立關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき



初代 川柳

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にも
あれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きや
うによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなるな
り。

おさへれば薄はなせばきりぎりす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渴虎」と書きしをいみじき
手がらのやうに驚ける人、若しこの句を見れば、何とかいはん。
本降になつて出てゆく雨やどり

(一)宋の文豪。名
は軾。東坡は
その號。徽宗
の初年歿。

(一)「いそがずばぬれざらましを」の歌と一對の巧語、急ぎてもぬれざらましを旅人の、あつとより暗るゝ野路のむらさ座頭。
(二)國學者。名は保巳。

道灌の「いそがずばぬれざらましを」の歌と一對の巧語、急ぎてもわろし。急がでもわろし。とにかく考へものなり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてさて目あきは不自由な。」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に捨假名、反點の左右にうるさく附きまとへるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、「四角な文字に灸をすゑ。」ともいはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は中等教育を終へたるものの文章にも、狐を馬に乗せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

中八日合津
萬 人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。かの赤穂の城渡の際、御金配分に高割を唱へし小野九太夫は、その露骨なるものか。
合 かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事をとらへて、よく滑稽化するのみならず、また最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

(一)本名大野九郎兵衛。
尋常茶飯の出來事

口吻を弄す

戸隱も神樂のあひだひげをぬき
岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふべし。毛
抜にひげぬくひま人の所作を、神代に附會したる働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたるは能因なり。天日に
焦して顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、も
のにそのさたなし。作者のつけ目はここなり。但し、袋草紙に、一度に
於ては實か。八十島の記を書けり。とあり。いつも室内旅行家にては
あらざりけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛
越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯まことに及び易か
らず。

(一)四卷。藤原清
輔の著した歌
學書
(二)能因法師の書
いた奥州紀行

(一)猪俣太。早太
とも書く。源
賴政の臣。
(二)源平盛衰記の
こと。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記の賴政鶴を射る條に、黒雲とは見たれども、天はまことに

序

暗し。いづくを射るべしと、矢所定かならず。
とあり。乃ち郎等隼太が左近の櫻に鼻衝き
あててまごまごする一場の喜劇を案出し
來れるなり。作者はいかなるへうきんもの
篇ぞ。
柳 樽
初 馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物
文 序 馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物
馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物

柳 樽
初 馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物
文 序 馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物

時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄
馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物
語中、出色の快談なり。これを圖にして大根の鞭を添へたるは、畫工
の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、
この作者の氣轉なり。

駄馬

(三)曾我五郎の
こと。

出色

氣轉

(一)源左衛門常世。諺曲鉢の木に出てる。
(二)神奈川縣鎌倉郡。
越えなづむ

(三)小野氏。平安時代の書家。三蹟の一。

湊合の妙

(四)支那周の武王の父。

(五)呂尙といふ。文王や武王を輔けて天下を統一させた人。
邂逅

(一) 佐野の馬戸塚の坂で二度ころび
戸塚の坂は鎌倉入の一難所。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり
湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然にしたてたるところに、一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王そばに寄り
さすがの聖人文王と、奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには、極めて平凡ならざるを得ず。たゞ、などとの語胸に一物ある趣を、状し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

一三 青葉若葉

あらたふと青葉若葉の日の光。
目には青葉やまほとゝぎす初がつを。
鞠ばしる友切丸やほとゝぎす。
杜鵑なくや湖水のさゝにどり。
一聲の江に横たふやほとゝぎす。
蘭田刈つて水鶏に遠き寢覺かな。
行水の捨てどころなし蟲の聲。
石工のみ冷したる清水かな。
橋おちて人岸にあり夏の月。
夕立や家をめぐりてあひる鳴く。
夕涼よくぞ男にうまれける。

(一) 芭蕉 素堂
(二) 芭蕉 文草
(三) 夢太 鬼貫
(四) 蕪村 太祇
其角 其角

(一)山口信章。俳人。甲斐の人。享保元年(一七二〇)生、三十七年(一七五二)歿。

(二)大島蓼太郎。俳人。江戸の人。天明七年(一八一七)生、四十七年(一八三七)歿。

(三)平泉與惣右衛門。俳人。攝津の人。元文三年(一七九三)生、三十八年(一八〇三)歿。

(四)炭太祇。俳人。京都の人。天明三年(一八二三)生、八年(一八三三)歿。

一四 信濃路の旅

正岡子規

(一)俳人、歌人。名は常規。愛媛縣の人。明治三十五年歿。年三十六。俳諧大要。病牀六尺。綴抄書屋俳句帖抄等の著がある。(二)群馬縣碓氷郡寸馬豆人

上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹聳え聳えて天も高からず。樵夫の唄足下に起つて、見おろせば、鶯かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山また山峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人といへるは彼かとはかり疑はれて、

つゞら折いく重の峰をわたりきて
雲間にひくき山もとの里

日もや、暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず。驅上る駒の蹄に踏散らす雲霧のあはひを見れば、一步の外は削りたてたる嶮崖の底も幽かにて、いと怖し。登れども登れども窮

あはひ

る所を知らず。山益、高く、雲愈、低し。

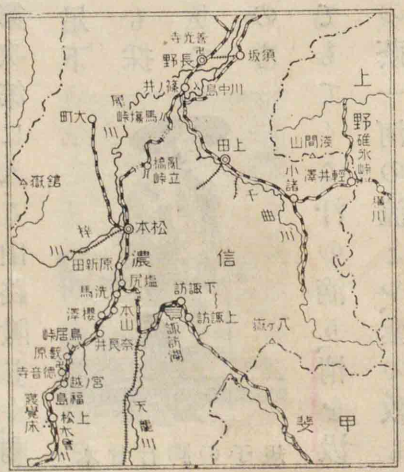
見あぐれば信濃に續く若葉かな

輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の旅衣見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、その色、染めたらんよりも麗し。

山々は萌葱淺葱やほとゝぎす

淺間は雲に隠れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。汽車を驅りて善

光寺に詣で、それより川中島を過ぐ。古戦場はいづくのほどとも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん、河の水はいたく瘦せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。



(一)天台宗。長野市の北端。阿彌陀如来をまつる。

(一)長野縣更級郡
猿ヶ馬場峠といふ。

次の日雨はふりきぬ旅衣、袂かたしきいづくにか寝ん。次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催してたどり行けば、行手遙かに山重れり。野の狭う尖りて、次第次第に入る山路険しく、弱足に登る馬場峠、さても苦しやと休む。足下に誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し登りて、とある樹蔭の葦簾茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を五六町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹の蔭一河の流とや、聖の教も時にあうてこそ有難けれ。



木曾行脚の規子

この夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゞむ。隣室の雑談に夢覺されて、つとめてここを立出づれば、はや爪先あがりの立峠。旅の

若衆と見て取つて、馬子が馬に乗れとのすゝめ。有難や乗りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。きのふの馬場峠はなぜに苦しみし。路のあたりに咲く白き花を何ぞと問へば、これなんうつぎと申す。といふ。いと嬉しくて、

むら消えし山の白雪来て見れば

駒のあがきにゆらぐ卯の花

峠にて馬をおる。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車に縮めて、洗馬までたどりつき、饅頭に

(一)東筑摩郡。松本市の南方。
(二)原新田の南約二里。
(三)洗馬の南一里餘。
(四)西筑摩郡。本山の南一里。

すき腹を肥して、本山の玉木屋に宿る。本山を出で櫻澤を過ぐれば、ここぞ木曾の山入。山のけしき水の有様、はや尋常ならぬけはひにうつつをぬかし、桃源遠からずと獨

(一)櫻澤の南二里餘

(二)奈良井の南二十町。藪原へ二十五町

(三)西筑摩郡木祖村字藪原
(四)西筑摩郡北境の山中から出て伊勢灣に注いでゐる

り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。^(一)奈良井の茶屋に憩ひて、「ぐみはなきか」と問へば、「ぐみといふものは知りはず。珊瑚實ならば背戸にあり」といふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはりぐみなり。あるじの女房深切に採りてくれたり。峽中第一の難所といふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力に面白う攀登る。

馬の背や風吹きこぼす椎の花
頂にて馬をおり、つくづく四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くして、樵夫の小徑微かに隠見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は愈、迫りて、かぶせかからん勢怖しく、奥山の雪を解かして清らかなる水は谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大いなる岩

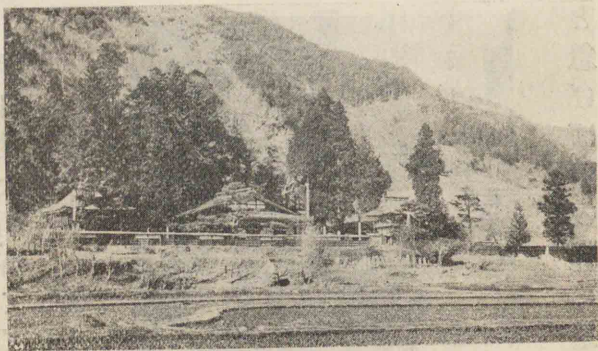
(一)藪原の南方二里五町

(二)壽永年間の建立

(三)木曾義仲

(四)宮越城址。木曾義仲の本城。一名山吹城。

(五)德音院殿義山宣公の略。義仲の法名。



德音寺(中中央本堂 右山門鐘樓 左義仲の廟所)

の一つ突出でたる上に、年ふりたる松の枝面白く、龍にやあらんと思はれたるもをかし。^(一)宮越の村はづれに佇むほどに、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞ現れ出でたる。笠をぬぎて慇懃に德音寺への道を問ふ。翁のいふ、^(二)「さても優しの若者や、旭將軍のなき跡を弔はんとてや、ここまでは來給へる。ここに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の址なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名残なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる。」と、一つ一つに指さす。ぞるに古をしのぶ言葉のはし、この翁、^(三)「諸ならばかき消すやうに失せぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公の碑」

(一)西筑摩郡福島町

の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや。福島を今宵の旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、
をりからの木曾の旅路を五月雨



旅亭
を出づ
れば、雨
小やみ
になり
ぬ。この
ひまに

(二)福島と上松との間

と急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き行きて棧に着きたり。見る目危き兩

(一)松尾芭蕉のこ
と。かけはし
や命をからむ
つたかづら
の句碑

岸の岩の、數十丈の高さに削りなしたるさま、一雙の屏風を押立て
たるが如し。神代の昔よりむし重りたる苔の、美しう青みわたれる
あはひあはひに、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗はしさ。狩野派に
やあらん、土佐畫にやあらん。下をのぞけば、五月雨に水嵩増したる
川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大
磐石も動く心地して、後の茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑
ぐに、大地の動き、しばしはやまず。蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかな
る橋の虹の如き上を渡るに、我が身も空中に浮かぶかと疑はれ、足
の裏ひやひやと覺えて、強くもえ踏まず。通り來し方を見わたせば、
ここぞ棧の跡と思しきも、今は石を積固めたれば、固より往來の煩
もなく、たゞ蔦かづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古の
面影なるべき。

昔たれ雲のゆききの跡つけて

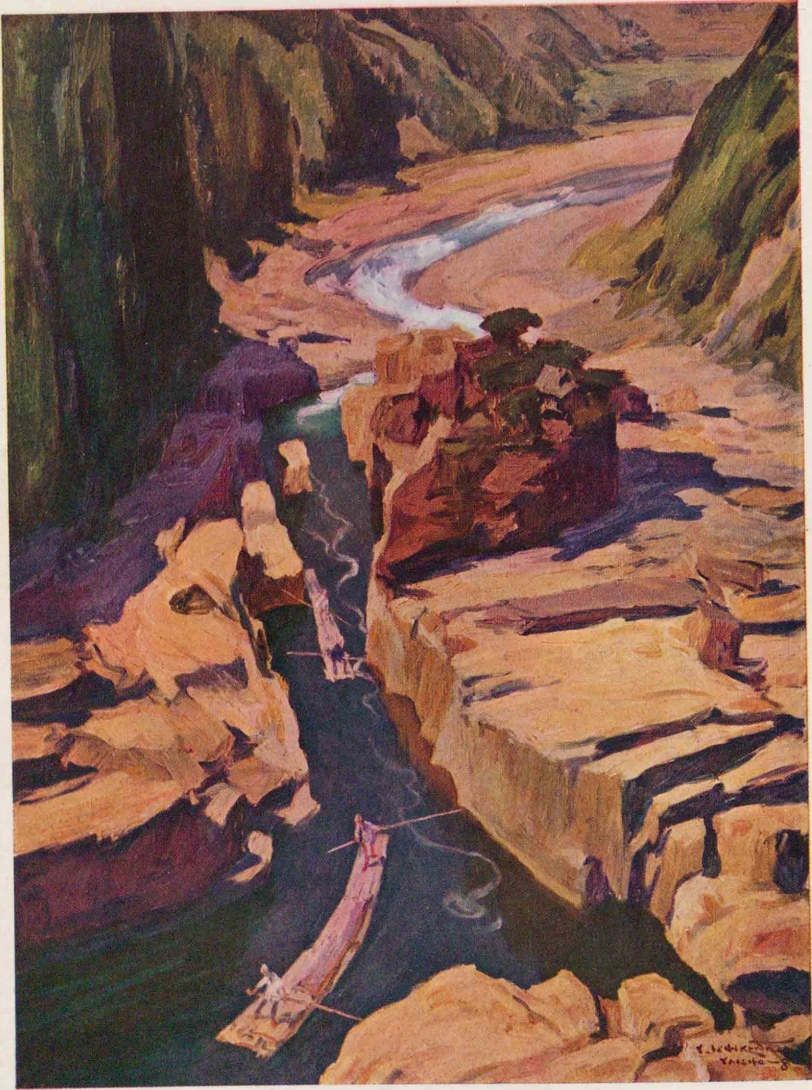
(一)長野縣上水内
郡三輪村字上
松

わたしそめけん木曾の棧

(一)あびま
上松を過ぐれば、ほどもなく寢覺の里なり。寺に至りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指さして、「ここは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のたゞ中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、腰掛岩、俎岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申すなり。」と、いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠やここは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん、岩石は峨々として高く低く、或は凹みて渦をなし、或は逼りて瀧をなす。いかさま仙人の住所とも覺えてたふとし。

—— 瀬祭書屋俳話 ——



筆 治 寅 川 石

床 の 覺 寢

(一) 俳人。伊勢國の人。元祿七年(二三五)歿。年五十一。奥の細道。嵯峨日記。笈之小文等の著がある。

(二) 「天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客云々。」(李白、春夜宴桃李園序)

(三) 元祿元年(二三四八年)

(四) 鯉屋杉風。杉山氏。名は元雅。鶴歩と號した。江戸の門人。享保十七年(二三八)歿。年六十六。別墅は江に在深川間堀に在つた。

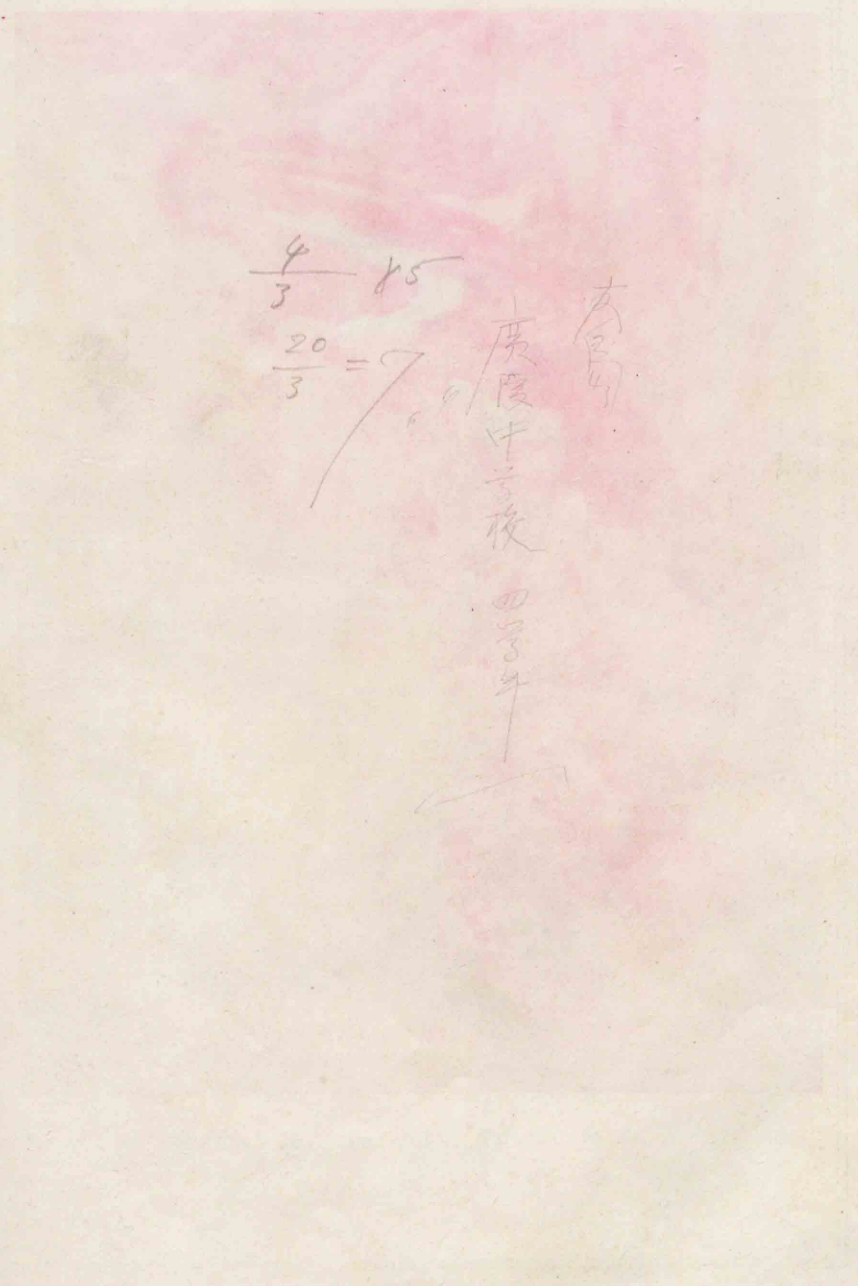
一五 奥の細道 その一

(一) 松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關趣えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取るもの手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸もすみかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれる



(一)上野公園から
西北に續く地
(二)東京府南足立
郡奥州街道
最初の宿驛

(三)埼玉縣北足立
郡奥州街道
の宿驛



旅人 (野田九浦筆)

ものから富士の嶺かすかに見えて、上野谷中の花の梢またいつかはと心細し。睦ましき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて幻の巷に離別の涙をそぐ。

行く春や鳥鳴き魚の目は涙
これを矢立の初として、行く道なほ
進まず。人々は途中に立並びて、後影の
見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行
脚たゞかりそめに思ひ立ちて、吳天に
白髪の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生き
て還らばと、定めなき頼の末をかけ、その日漸く草加といふ宿にた

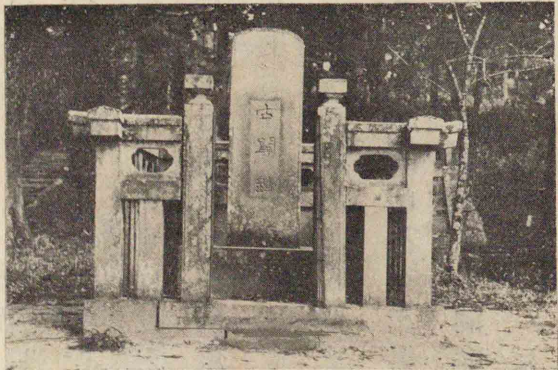
(一)「たよりあら
ばいかに都へ
つげやらん、
はけふ白河の關
は越えぬ」と
(拾遺集、平兼
盛)

風騷の人

(二)藤原清輔。二
條天皇の御代
の歌人。竹田
大夫國行とい
ふものこの關
を過ぐるると
服装を特に改
めたること清
輔の著草子に
見えてある。

どり着きにけり。瘦骨の肩にかかれるものまづ身を苦しむ。たゞ身
すがらにといでたるを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨、筆のたぐ
ひ、あるはさり難き錢などしたるは、さす
がにうち棄て難くて、路次の煩となれる
こそわりなけれ。

心もとなき日數重るまゝに、白河の關
にかかりて旅心定まりぬ。いかに都へと
便り求めしも理なり。中にもこの關は風
騷の人、心を留む。秋風を耳に残し、紅葉を
面影にして、青葉の梢なほ哀なり。卯の花
の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越
ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めしことなど、清輔の筆に
も留め置かれしとぞ。



白河の關の址

(一)芭蕉の門人。俗稱河合宗五郎。旅行の同伴者である。寶永六年(二二八九年)歿。年六十二。
 (二)磐城、岩代を流れる大河。
 (三)磐梯山のこと。
 (四)福島縣石城郡同相馬郡。
 (五)同相馬郡。
 (六)同田村郡。
 (七)福島縣岩瀬郡。子石と須賀川との間にある新田。
 (八)同岩瀬郡。姓は相良、名は伊左衛門。
 (九)等射はその號。芭蕉の門人。寶永二年歿。年七十八。
 (一〇)支那湖南省の北部にある大湖。
 (一一)支那浙江省に在る。

卯の花をかざしに關の晴着かな
 とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右に磐城相馬、三春の莊、常陸下野の地をさかひて、山連なる影沼といふ所を行くに、けふは空曇りてもの影うつらず。須賀川の驛に等射といふものを訪ねて、四五日留めらる。まづ白河の關いかに越えつるやと問はる。長途の苦み、身心疲れ、かつは風景に魂奪はれ、懷舊に腸を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

船をかりて松島に渡る。その間二里餘り、雄島の磯に着く。
 抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をたふ。島の數をつくして、峙つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重に重り、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱け

(一)山を掌る神。
 (二)禪僧。土佐の人。萬治二年(二二二九年)歿。年七十八。

風雲の中に旅寝す

(三)醫者。芭蕉の友人。江戸の人。
 (四)芭蕉の門人。姓は中川。美濃國大垣の人。

るあり、兒孫を愛するが如し。松の緑濃やかに、枝葉汐風に吹きためられて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人が筆を揮ひ、詞をつくさん。

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂、松毬などうち煙りたる草の庵、閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寝すること、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとぎす

余は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別る、時、素堂松島の詩あり。原安適、松が浦島の和歌を贈らる。袋を解いて、今宵の友とす。且つ杉風、濁子が發句あり。

- (一)元祿二年五月、雉兔芻蕘
- (二)宮城縣牡鹿郡の町
- (三)「すめろぎの御代榮えんとあつまる」とみちのく山にこがれ花さく。(萬葉集)
- (四)同桃生郡橋浦村
- (五)同牡鹿郡稻井村の字
- (六)よそめに見て
- (七)同登米郡新田村新田沼
- (八)同郡登米町
- (九)藤原清衡、基衡、秀衡
- (一〇)平泉館址、奥の御館
- (一一)秀衡が作つた平泉鎮護の山、富士山に擬し雄山の金鷄を山上に埋めた

一六 奥の細道 その二

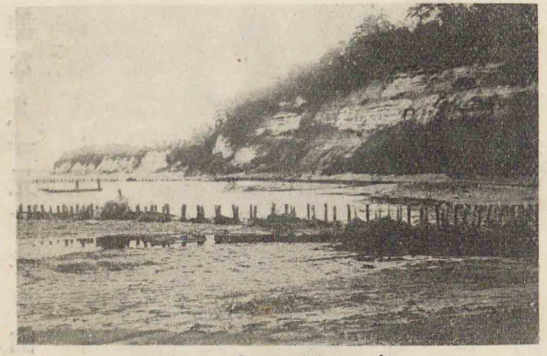
十二日、平泉へと志す。聞傳へたる姉齒の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兔芻蕘の行交ふ道そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の巻といふ湊に出づ。黄金花咲く。と詠みて奉りたる金華山、海上に見わたされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、かまどの煙立續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸く貧しき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く袖の渡尾駿の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に至る。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形をのこす。まづ高館に上れば、北上

- (一)衣川館、義經の居館
- (二)泉三郎忠衡の居館

- 功名一時の叢となる
- (一)國破山河在、城春草木深(杜甫)

- (三)清衡、基衡、秀衡



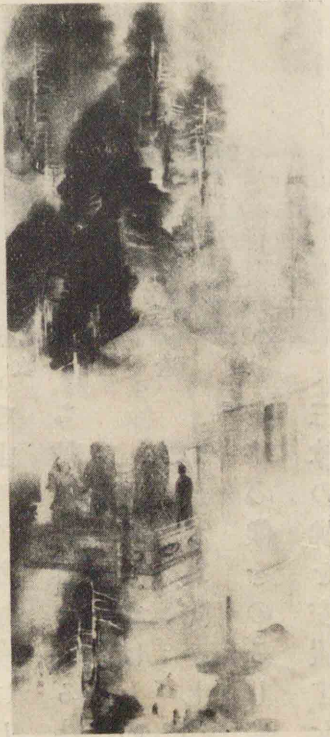
衣川遺址

川南部より流る、大河なり。衣川は泉が城を遶りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり。と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡
かねて耳驚かしつる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽敗し、ばし千歳の記念とはなれり。

(一)天台第二世の座主。下野の人。貞觀六年(五二四年)歿、年八十。
(二)山形縣北村山郡尾花澤町。

五月雨のふりのこしてや光堂
山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師開基にて、殊に清閑の地なり、一見すべき由人々の勸むるによつて、尾花澤よりとつて返す。その間七里許りなり。日未だ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、



(筆谷龍谷) 堂 光

土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢてももの音聞えず。岸をめぐり岩をはひて佛閣を拜し、佳景寂莫として、心澄行くのみ覺ゆ。
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲
最上川はみちのくより出でて山形を水上とす。ごてん、はやぶさ

(三)山形市の邊を指したのであらう。

(一)秋田から山形に出る間に在る。
(二)山形縣飽海郡酒田町。

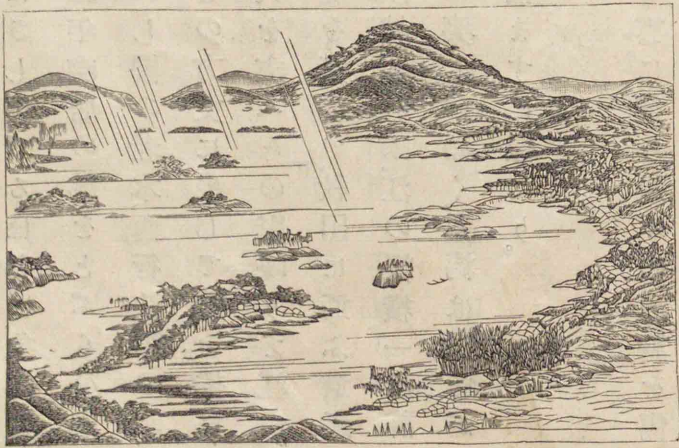
(三)義經の臣常陸坊海存を祀る所といふ。

などいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻積みたるをやいな船といふならし。白絲の瀧は青葉のひまひまに落ちて、仙人堂岸に臨みて立ち、水漲りて船危し。

(四)秋田縣由利郡鹿島山の西北麓。その海岸は、その後文化元年(二四六年)鳥海山の噴火によつて埋没した。

闇中摸索

五月雨を集めて早し最上川
江山水陸の風光數をつくして、今象瀧に方寸を責む。酒田の湊より、東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その間十里、日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨濛朧として鳥海の山隠る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色ま



(畫挿傳詞繪翁蕉芭) 瀧 象

たたのもしと、あまのたま屋に膝を容れて、雨の晴るゝを待つ。

その朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向う

の岸にあげれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干満珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、

風景一眼のうちにつきて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむやむやの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪うち入るゝ所を汐越といふ。江の縦横一里許り、

面影松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し。寂しさに悲みを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花。酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々の思胸を傷ましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地

(一)能因法師が閑居のあとといひ傳へられる。

(二)「きさかたの櫻は波にうづもれて、花の上こぐあまのつり舟」(西行法師)

(三)宮城縣名取郡陸羽の境關谷山にあつた關

(四)秋田縣秋田市

(五)出羽と越後の境。

(一)市振と書く。越後に屬し、越中を隔てて境中に對する。

(一)詩人、評論家、昌治、明治十年六月新潟縣に生れた。黎明期文學者。野山雜記等がある。

羈旅

に歩行を改めて、越中の國いちぶりの關に至る。この間九日、暑濕の勞に神を腦まし、病起りて事を記さず。

荒海や佐渡に横たふ天の川

一七 郷土の魅力

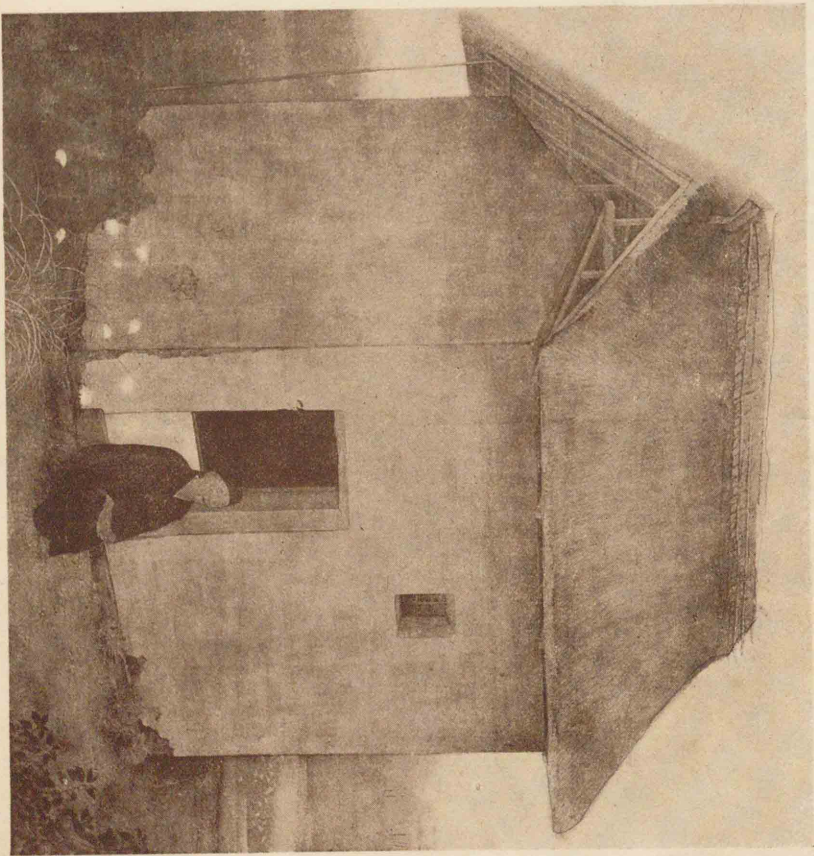
相馬 御風

郷土といふものの人間の心を引きつける作用は、今更ながら不思議なものである。一方に「月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を棲所とす。古人も、多く旅に死せるあり。余もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。」といひ、或は

「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。」などといつてゐたかの芭蕉翁でさへ、他方に於ては

「代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえはべる由。我
 今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔の懐かしきまゝ
 に、はらからのあまた齢傾きてはべるも見捨難くて、初冬の空の
 うち時雨る、頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末、伊陽の山中に
 至る。なほ父母のいまそがりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふこと
 のみあまたありて、
 ふるさとや臍の緒に泣く年の暮。」
 などといつてゐる。

ふるさとは蠅まで人をさしにけり
 ふるさとは西も東もばらの花
 といった風に、永い間自分の故郷を詠つて、旅から旅へと漂泊して
 ゐた、あのすねもの（なまもの）の俳諧寺の一茶ですら、晩年には
 これがまあつひの棲所か雪五尺



野人 一茶 高山 完筆

などと驚きながらも、その雪の深い信州柏原の郷里に歸り住んで、
そこで一生を終へた。

更にかの近世稀有の聖僧といはれる越後の良寛和尚の如きも、
二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあき
たらないで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を續け
て、靜かな往生を遂げてゐる。

ふるさとへ行く人あらばことづてん

けふ近江路をわれ越えにきと

草枕夜ごとにむすぶやどりにも

むすぶは同じふるさとの夢

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、如何に彼が故郷を慕ふ思の
切なものであつたかを察することが出来る。

二十三歳で妻子を振棄てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西

行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

みやこ離れぬわが身なりけり

などと歌つて居り、且つ晩年には都に歸つて死んだ。

かういつた風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られたこれ等脱俗の人々すらも、不思議に彼等の生まれ且つ育てられた郷土に對しては、しかく切な愛慕の情をもつてゐた。抑この郷土の人間に對してもつてゐる魅力は、どこからくるのであらうか。

抑、郷土が私たちの心を引きつける點は、どういふところであるか。その地の自然が、他のいづれの土地よりも風景の美に於て優れてゐる爲かといふと、必ずしもさうではない。人情が特に他のいづ

醇美

理智的

功利的見地

れの土地のそれよりも醇美である爲かといふに、それも然りといへない場合が少くない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいい外的條件がある爲かといふに、それも必ずしもさうばかりとはいへない。さうかといつて私たちは、理智的に考へて、故郷といふものは大切なものだとして明白に判断してから後に、故郷を慕つてゐるとはなほ更考へられない。然らば、人々は何故に自分の郷土といふものに心を引かれるのか。それは全く「何とはなし」にある。理智的判断によるのでもなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめるといふのでもなく、それはたゞ「何とはなし」である。郷土の人心を引きつける魅力は、實にこの「何ともいつて見やうのないところから發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融かした一種不思議な音楽的な、詩的な魅力である。また私たちが郷土を慕ふ心は、全

本然的情緒

く自分にもよくわからない内心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定し難い本然的情緒である。この不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らくいかなる理智の人と雖も、否定することは出来ないであらう。

けれども、今の時代にはおひおひこの自分の郷土といふものを失ひつゝ、ある人が多くなりつゝ、あることも、また明らかな事實である。

私は曾て、漁夫にとつて海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所ではなくして、また實に彼等にとつての貴い心の糧を與へる領土であるといふやうなことを書いたことがある。全く漁師ほど海を愛することの切なものはない。それは海は彼等にとつては離れ難い心の世界である。農夫にとつて山野田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。

外に愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に内に心靈の故郷を失ふことである。漁師にとつて海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁師は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。

西洋の或新しい女の哲學者の書いたものの中に、こんな一節があつた。

「ロシヤとの戰爭中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士は、何かの機會に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして、一種の精神的更新を感得したといふことである。一體、ヨーロッパの遠足家は、無慈悲にも自然の最も美しい春の着物であるところの草花を汚したり、さまざまの樹木や記念物を傷つけたり、卓子や椅子などにまで容赦なく自分のつま

Europe

らない名前などを彫りつけたりして、彼等自身を樂しませてゐる輩である。……

私たちは一般のヨーロッパ人が、それほど自然を愛し得ない人たちであるかどうかの事實を知らない。然し、私たち日本人が一般に自然を愛する切な心をもつた民族である事實は、信じて疑はない。自然は何といつても私たちの心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて、いつとはなしに健康を恢復することが出来るやうに、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し自然を懐かしむことによつて、その健康をとりもどすことが出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむことの出来る幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子どもたちにも、永遠に、郷土の有する魅力を失はせたくはない。それは私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。

——對山雜記——

一八 天地の心

島木赤彦

高槻のこす糸にありて頬白のさへづる春となりけ
 るかも



島木赤彦筆蹟

若山牧水

うすべにに葉はいちはやくもえ出でて咲かんとすな
 り山ざくら花

牛のゆく白河道の水ぐるまかたりことりといとまあ

金子薫園

(一) 歌人。名は雄
 太郎。明治十
 年東京に生ま
 れた。

畑中に手も
 てわかこく
 紫蘇のみし
 にほひ清し
 に頃となり
 赤彦

(一) 歌人、書家。名は三郎。明治十年東京に生まれた。

かたすみのかたすみのつげば四つ五つはねのこほろぎ

(二) 歌人。慶應大學教授。明治六年京都に生まれた。

葉ざくらの葉だりの露の朝じゆり山吹草の花咲きにけり

うたをいふじりろと巻け
是けつとくぬこふら

蹟筆寛野謝與

(一) 岡 麓

(二) 與謝野 寛

鳴きに鳴くあさまし長しかしがましみじかき歌をしらぬ蟬かな

前田 夕暮

まひる日のあきらかにてれる山原は大いたどりの花さかりなり

長 塚 節

たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

(一) 中村 憲吉

夏山をめぐり疲れて日暮がたと成りの國の出雲へくだる

高原の月が
光はくまな
くれて落葉が
くれののみづ
の音すも
茂吉

蹟筆吉茂藤齋

(二) 齋藤 茂吉

しづかなるたうげをのぼりこし時に月の光は八谷をてらす

(三) 尾上 八郎

(一) 歌人。法學士。明治二十二年廣島縣に生まれた。

高原の月の光はくまな
くれて落葉が
くれののみづ
の音すも
茂吉

(二) 歌人。醫學博士。明治十五年山形縣に生まれた。

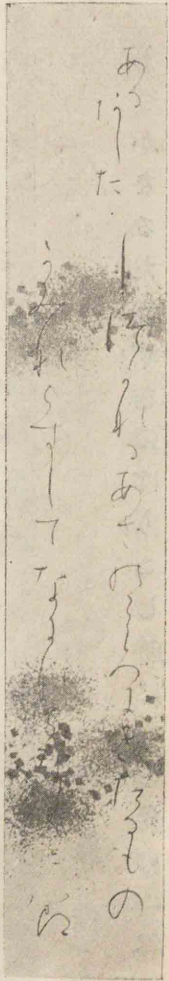
(三) 歌人。文學博士。柴舟と號する。東京女學校高等師範學
九年岡山縣に
生れた。

あるあした
あつかなる
あさの心
きみなるも
かみなるも
しかならす
らなくに

黒かひし山
まのつらみ
ほのあかみ
しはらかみ
ほしはらか
はれてはら
信綱

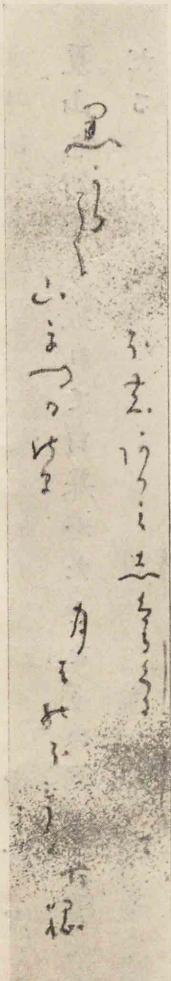
(一) 歌人
多郎 名は幾
昭和十三年
昭和十三年
昭和十三年

しづやかに月は照りたりあめつちの心とこしへ動かぬがごと



蹟筆郎八上尾

ゆく秋の大和の國の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

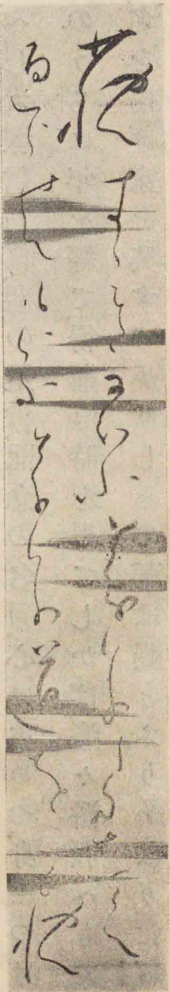


蹟筆綱信木々佐

目の前に五百重おきふす雪の山しづかなるかな鷹ひとつかける

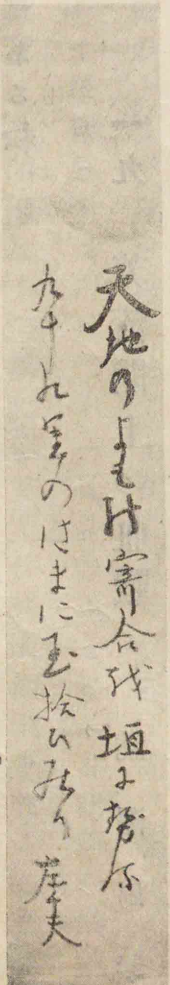
(一) 古泉千樞

松原のしがるゝ寺の前どほりとほる人はあれど日の暮のかげ



蹟筆秋白原北

みぎひだり背によりつくを負ひなめて笑あふるゝ眞晝の家に



蹟筆夫千左藤伊

天地のよも垣
の寄合を垣
にせれる九十
九里のはま
に玉拾ひ居

(二) 文學者
左千夫
宮城
縣人
明治
三十六年
四月十二

秋すゝきに
ほふとなく
のしとせり
て通らせ
りもふとな
りの道を
白秋

(二) 落合直文

一つもて君をいはん一つもて親をいはん二もとある松

一九 芳流閣上の血戦

瀧澤馬琴

古の人いはずや禍福は糾へる繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり。とは思へども豫てより誰かよくその極みを知らん。憐むべし犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱苦のうちを年を経て得難き時を得てしかば、遙々瀕我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍とふりかはりたる村雨の刃は故の物ならで、我が身を劈く響とぞなりし、憾をここに釋く由もなく、こと急にして意外にあり、僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、影の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れどもと

(一)江戸末期の小説の大家。嘉永八年(二五〇)元月、南總里見八犬傳の著者。二百九十種の外著がある。禍福は糾へる繩の如し。
(二)禍之與福兮何異糾纏。漢書賈誼傳。塞翁が馬。
(三)禍兮福之所伏。福兮禍之所極。老子。
(四)茨城縣古河。



瀧澤馬琴

にかくに、脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を極めたる、心のうちはいかなりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。さればまた犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて人にぞかかる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよ。とて、なまじひに擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高きかの樓閣は三層なり、その二層なる檐の上まで、身を霞ませて上りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪難き頃、は六月二十一日、きのふもけふも乾蒸の、饑熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、ここ生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の、小舟楫緒絶えて、進退既に

身を霞ませて

(一)利根川のこと。

谷りし、敵にしあればいかで我、繋ぎ留めんとむささびの、樹傳ふ如く、さらさらと、上りはてたる三層の、屋根には目柴翳す由もなく、かたみに隙をねらひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

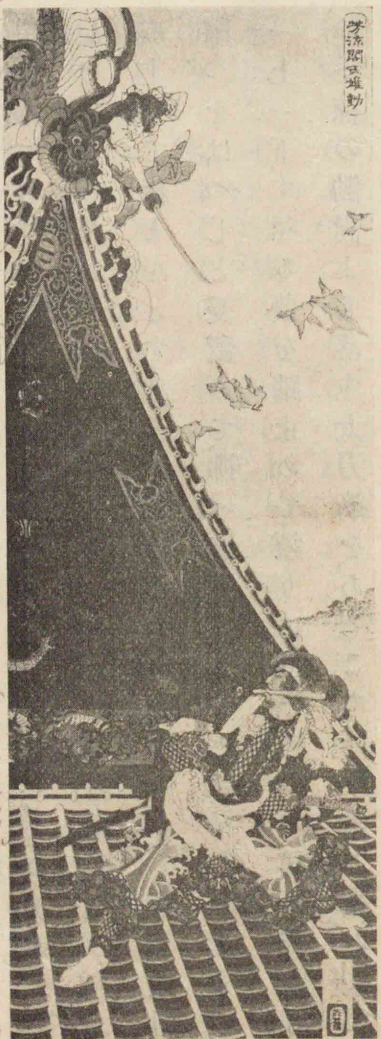
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰をうちかけて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍、長刀を煌かし、或は矢を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば、擊留めんとて、項を反してこれを觀る。加之外面は、連綿として杳かなる、河水遶りて、砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鷹を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも、羅に入りぬ。獸ならずも、狩場に在り。三寸息絶ゆれば、ことみな休まん。脱ればてじと見えたりけり。

(一) 足利持氏の子、鎌倉の管領。
(二) 管領足利氏の執權職。

(三) 周代の哲學者、名は翟。
(四) 名は公輸般、魯の人。

その時信乃思ふやう、初層、二層の屋の上まで、追上らんとせし兵等を、切落しつる。その後は、絶えて近づくものなきに、今たゞ獨り上り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴にせる勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。

芳流閣上血戦



戦血の上閣流芳

(一) 欽明天皇の朝、百濟に使し、雪夜幼兒の虎を食はれたるを憤り、虎穴をさぐりて、虎を獲たり。
(二) 和田義盛の臣、將軍實朝の前で、二個の大鹿の角を重ねて折つた。

遮莫

遮莫一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難きことやはある。よき敵にこそござんなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方桴に、立つたるまゝに、寄するを待てば、見八もまた思

御詫さふ

一上一下
手練
虚々實々
見る目遙か

ふやう、かの犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりとても
搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇
み出されしかひもなし。搦め捕るとも撃たるゝとも、勝負を一時に
決せんものを、と思ひにければちつとも擬議せず、御詫さふ。と呼び
かけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進
み上りて、組まんとすれども寄せつけず、心得たり。と鋭き太刀風に、
撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさずこむ刀尖を、支へて流す
一上一下、すべる藁を踏止めて、頻りに進む捕手の秘術。彼方も劣ら
ぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負
をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせ
ず氣を籠めて、見る目もいとど遙かなり。
さるほどに犬塚信乃は、悔り難き見八が武藝に敵を得たりけり
と、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀

錚然

ていたらく

音掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に闘ふ時、沛
然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕
べの虹か、と見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を争ひして
いたらく、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、脇當のはづれ
を、裏かくまでに切りさかれしかど、太刀をぬかず。信乃は刀の刃も
續かで、初に淺痕を負ひしより、次第に疼みを覺ゆれども、足場をは
かりて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、
返す拳に付入りつゝ、やつとかけたる聲とともに、眉間を望みては
たと打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が刃は鏗際より、折れて遙
かに飛失せつ。見八得たりと無手と組むを、そがまゝ、左手に引着け
て、迭に利腕しかと取り、振倒さんと曳聲合はせて、揉みつ揉まるゝ
力足、これかれ齊しく踏みすべらして、河邊の方へころころと、身を
まろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削

り成したる蕘の勢止るべくもあらざめれど、迭にとつたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らでほどもよし、水際に繋げる小舟の中へ、うち累りつ、挫と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

——南總里見八見傳——

自修文

根分の後の母子草

瀧澤 馬 琴

(一)仁孝天皇の御代二四八一年。
(二)東京市麴町區に在る。九段坂の西に竝んだ坂。馬琴は當時この坂の下に住んでゐた。
堵の如し垣をめぐらしたやうに人のおほぜい集つてゐること。
さらほふ年老いてやせ衰へてゐること。

文政四年辛巳の春二月晦日黄昏頃、飯田町の中坂に行倒れたる老女ありとて、これを觀るもの堵の如し。この日、自身番屋に集ひゐたる當番の町役人等、定番人を遣はして、その體たらくを見せけるに、「旅行くものと覺しくて、むげに老いさらばひたるが、長途に疲れ、足痛みて、一步も運ばしがたし。」といふなり。これによりて、町抱へる者に背負はせて、やがて番屋に扶け入れて、事の

(一)福島縣西白河郡白河町。

逐電 自分の住所を逃げ出すこと。

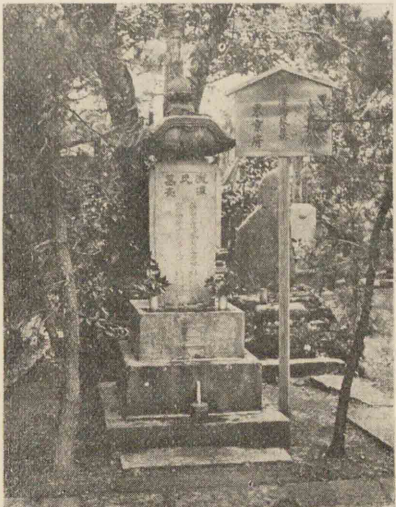
(二)第一百九代光格天皇の御代二四七三年。

やうを尋ねれば、答へて曰く、「ばばは奥州白河の城下、中の町なる宮大工十藏が後家にして、名をしげと呼ぶるゝもの、今年七十一歳になりぬ。夫、十藏が世を去つてのち、十三箇年以前、文化六年の春、わが子源藏といふ者逐電して、行方も知らせず。人づてに聞けば、江戸に在りといふ。いかでわが子の在所を尋ねて逢はばやと思ひ定めしは、九箇年以前のことなりき。かくて、文化十年の春の頃、陸奥よりあこがれ來て、江戸に留ること半年許り、四里四方の外、近郷まで月毎日毎に尋ねしかども、夢にだに逢ふよしなかりき。さては江戸にはあらざるならんと、やうやくに思ひかへして、愈、廻國の志念を堅うし、東山、西國、いへば更なり、南海、北陸おちもなく、およそ六十六箇國の靈山、靈地を順禮して、「過去には亡き人の菩提の爲、現在には命の中に我が子にめぐり逢はしめたまへ。」と念ずる外に、業もなし。乞食して行く旅なれば、人の情に遇ふ日は稀にて、露に宿り風に梳り、或時は、荒磯の浪風に吹きすさまれて、終夜夢も結ばず、また、或時は、深山路の雪に閉ぢられて、つく竹杖の節も届かず、さまざまの艱苦を歴たれど、これまでは一度もやみ煩ひしことなく、旅

(一) 神奈川県橋樹郡高津村多摩川の渡

寝すること九年に及べり。今は既に巡りつくして、廻國すべき方もなければ、再び江戸を志して、木曾路を下り、甲斐が嶺を打廻り、よんべは二子の渡とかいふ川邊のあなたなる里に宿りつ。さて、今日、江戸に来つるなり。かかりし

ほどに、あの御坂のあたりにて俄に足の痛み出でて、一步も運ばし難ければ、思はずも倒れ侍りき。」といふ。



馬の琴の墓

町役人等由を聞きて、「心地は如何に。」と尋ぬるに、「足の痛めるのみにして、心地は常に變らず。」と答ふ。「江戸に知る人ありや。」と問へば、「否、知る人と

(二) 東京市京橋區に在る。菩提所。祖先代々の墓。手形。後日の證據として文書に記したるもの。

ては侍らねど、八丁堀なる松平越中守様は國屋敷にておはしますなり。かしこへ送らせ給へ。」といふ。これより先、その腰に附けたりし風呂敷包を解かせて見るに、九箇年以前、故郷を立ちいづる時、十藏しげ等が菩提所なる何某寺より書いて與へし通り手形といふ證文一通あり。濕風、塵埃に汚れけん、紙は茶

吻合。びつたりと正しく一致すること。

酉の初刻。今の午後六時半をいふ。やつがれしもへわたつばら。火急。大急ぎ。

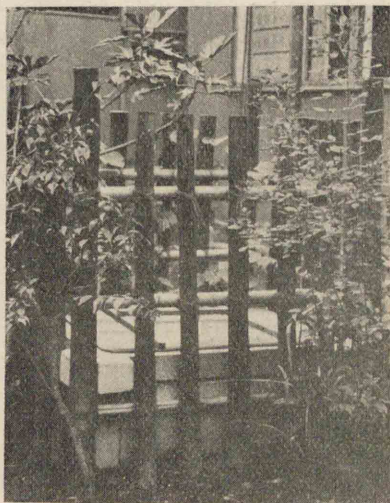
をもて身めたるごとく、いと古びたりけれども、その印章は疑ふべくもあらず。この他は錢八百文と布のぼろとのみなりけり。そのいふ由と寺手形と既に吻合するをもて、番屋の奥の間に臥さしめて、藥を與へ、且つ、夕餉をたうべさせなとす。

さるほどに、日は暮れて、酉の初刻も過ぎたる頃、武家の中間とおぼしき男、自身番屋におとなうて、「やつがれ先に主用の使にたちて、ここの中坂をよぎりし時、行倒れたる老女を見たり。心に懸る由もあれば、つばらに問はまほしかりしかど、火急の使なるをもて、時の後れんことの口惜しくて、思ひながらに打過ぎたり。今その歸るさなるにより、中坂にて人に問ひしに、番屋に扶け入れられて、ここにありとぞいはれたる。その老女を見せ給へ。」といふ。

この時、しげはまどろみたるを、町役人等呼びさまして、「そなたの由縁の人にやあらん、見まほしとて、只今來たり。對面せよ。」といふほどに、しげは忽ち起直りて、「そはわが子源藏ならずや。やよ、そなたは源藏か。源藏に非ずや。」とせはしく問ひつゝ、這寄るを、町役人等押止めて、「さのみせきてはことも分ら

とさまかうざ
まあれやこれや
と、いろいろに。

ず。心を鎮めて問へ。」といふ。その時、くだんの間は燈火をさしむけて、と
さまかうざまうち見つゝ、「わが母に似たれども、年あまた経たることなるに、
いたく老衰したるをもて、定かにはいひがたし。」といふ。



馬の琴の舊住宅址

町役人等これを聞いて、「然りとも、
かれみづから奥州白河仲の町、大工十
藏が後家、名はしげと告げたりしこと
の由分明なるに、幼き時に別れても、
親の名までを忘れはせじ。忘れやしつ
る。」と詰る。「さん候。その名に違ひは
なければども、世にはまた同名異人のな

きにしも候はず、また偽りて利を謀る者もなしとすべからず。身につけたりし
そが中に證據となるべき物などの候はずや。」と問ふ。町役人等諾ひつゝ、「かの
手形を開きて見すれば、見つゝ小膝をはたと打つて、「わろくも疑ひつるものか
な。わが母に相違候はず。」といふを、しげは聞きあへず。「然らば、そなたは源

うつせの息の
内
現在生きてゐ
る間。

藏か。「源藏にこそ候なれ。」と名のれば、しげは這ひまつはりて、抱きつゝ、「や
よ、源藏よ。われに逢ひたい、逢ひたいと思ふばかりに、九箇年このかた、日
本國中うちめぐり、いくそばくの艱難苦勞も、願かなうて、うつせの息の内な
る今宵いま、逢ひみることの歡しさよ。やよ、源藏よ、顔を見せよ。そなたは
幼かりし時、左の眼ぶちに腫物出できしそのをりに、眼の中へ針二本まで打た
せしことあり。その針の痕今もあらん。こちらを向いて見せずや。」と口説きた
てつゝ、また抱きしめて、涙は雨と降りそゞぐ、その歡はなかなかに譬ふるに
物なかるべし。天地を拜み、町役人等を一人一人に伏拜む慈母の哀歡無量の恩
愛、今さら膽に銘じけん、源藏もはふり落つる涙を袖にせきかぬれば、人皆泣
かぬはなかりけり。

この時のしげが有様は、「和漢巨筆の稗官なりとも、寫しとらんこと易かるべ
からず、また、俳優の上手なるも、よくまねんこと難かるべし。」と、後にぞ人
の評しける。

二〇 美しき故國

矢代 幸雄^(一)

五年目の秋を日本に迎へて、忘れたものに再び出逢つて珍しく
 てしやうのないやうに、日本の秋は美しいなと思ひました。平野に
 はまだ夏の名残が暑く溜つてゐる九月初に、昔行きつけた蘆^(一)の湯
 へ登つて行きました。薄が見たかつたからです。湯^(三)の花澤へかけて
 の高原を秋風がわたつて、銀緑の細長い薄の葉は、貫^(四)之の草書の亂
 れがきは、かうもあらうかとばかり波打つてゐました。湯の宿に滞
 留してゐる中に、目に見えて秋が惜しくなつてゆきました。けふは
 寒いと思つて高原へ出ると、高原の銀色は見違へるやうに、牙^(二)えて
 來ました。ここに高原の銀色といふのは、私の好きな薄原のことで
 す。絹絲のやうな穂の藤紫から紅が褪せて、凄愴として、牙^(二)えた光が
 まさつて來たのです。そこに秋風が波打たせてゐました。

(一) 東京美術學校
 教授。明治二
 十三年、横浜市
 に生まれた。美
 術史、美術
 評論等に筆を
 とつてゐる。

(二) 箱根山中にあ
 る。

(三) 蘆の湯から十
 五町。

(四) 紀貫之。

凄愴

Switzerland.

日本は綺麗な國だと思ふのです。日本を褒める爲に外國を悪く
 いふ氣はいたしません。たゞ日本はほんたうに綺麗な國でした。去
 年の秋はイギリス、一昨年の秋はイタリ、その前の秋はス^(一)ピスか
 らドイツを通つてイタリに歸る、もう一つ前の秋はフランス、ス
 ペインを遊び過ぎて、秋ももう深い頃イタリに歸つた。自然はど
 こも美しい。秋の空が時雨れても、初冬の空がからりと晴れても、國
 國にその國特有な美しさがある。でも日本の秋——それはまた無
 上に綺麗です。

秋ばかりではありません、日本の春も殊にさうです。今年、京都
 から中國九州へと旅して見ました。櫻の花と菜種の花とが到る所
 満開でした。菜種が野を黄色く、だんだら縞にすると、櫻は山を鹿子
 斑にします。土佐繪の夢です。よく古土佐の繪卷物には、——例へば、
 ねざめ物語繪卷の見返に、一面に櫻の花が咲いてゐます。細い枝と

幹との星のやうな花が、一面にみんなこちらを向いて咲いてゐます。をかしいほど花だらけです。あれを美術の學者は、日本畫に於ける自然の圖案化裝飾化といひます。いゝえ、そんな人間の勝手に工夫したものではありません。あれが日本の自然の相すがた、そのすなほな日本人の心への印象です。久しぶりに日本の春を歩いて、私は古土佐の繪卷物の國を歩くといつたやうに、華やかに、そして寂しく浮かれました。

それから秋。秋といへば、この間また平家の嚴島へ納めた經卷を見ました。あれは銀の藝術です。金光眩い佛畫の彩色から、王朝時代の莊嚴藝術が生まれる。金莊嚴が洗はれ白く練れて艶麗となり、纖巧となり、遂に銀色の涼しい夢となる。嚴島經卷を見ながら、私は華麗な神經質の王朝の秋を見たやうな心地がしました。日本の秋の一相が確かにそこにある。經卷の中勸持品でありましたか、料紙裏

(一)長寛二年夏の末に奉納。三十三卷

に、銀地に群青色の桔梗の花が、小さい星のやうに寂しさうに描いてありました。銀河に明るい秋の夜に、見えない小さい星を懐かしむ、それともまた萩薄にしつとりと置かれた白露の圖といひませ



返見の卷繪物語めざね

うか。歐洲の秋の野に銀の光の露の面白さを私は知りません。あちらの牧場はいち早く刈られて枝垂れ靡く草の葉がないからでせうか。牧畜が盛んで、おいしい草は刈られない中にもう放牧の牛と羊とに根本まで綺麗に食べられてしまふのですもの。西洋の草場は遠見が毛氈を敷いたやうに綺麗なだけです。運動場の芝生の通りです。

日本の秋の野は曲線模様です。もの狂はしい旋律です。また薄の

西洋の景色が、西洋の食物のやうに、どこか大味のやうな氣のするのには私だけでせうか。スキスは綺麗だけれども、掃除したやうな綺麗さです。イギリスの田舎は平遠閑雅綠蔭に清流緩やかにめぐつて、ちやうどまぐ白鳥が浮かんだりして、えもいはぬ眺です。けれども、なんだかぢきに飽きてしまふのは、やかましく賞められる英國の風景畫に飽きやすいと、大した違ひはありません。イタリヤの青空は眼も痛いくらゐ鮮かです。ナポリの白い建物の尖端をしつくりと限る濃藍とも、紺青とも、群青ともいひやうのない永遠相の空も、瞥見的感銘の激しいわりに、あとに、残る感じは大ざつぽです。何故でせう。

二一 西湖の月

谷崎潤一郎

夕食を済ませた後、西湖の月を見るべく、ホテルの後から畫舫に

瞥見的感銘

小説家、戯曲家、明治十九年東京に生まれ、銀座に生れた。鮫人、金と銀、神と人間との間等の著がある。

天と地を繋ぐ書物

(一) 浙江省孤山の麓にある、杭州城の城門の

(二) 西湖十景の一。

(三) 江西省九江府

(四) 江西省潯陽道匡山といふ風景絶佳。

乗つて出たのは、その晩の九時頃であつたらう。東岸に沿うて、湧金門から柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舳に座を占めて、一點の曇もない大空の月の光を、満身に浴びてゐた。如何に限なく晴れわたつた宵であつたかといふことは、湖を取巻いてゐる四方の山々や、汀に近く女の洗髪のやうにうなだれてゐる楊柳や、稀には岸邊の樓閣などまでが、一つ一つその影を水面に落してゐたのでも、大凡想像することが出來よう。曾て潯陽江邊の甘棠湖の月を觀た時に、雄大な廬山の山容が水にくつきりと映つてゐるのを眺めた覺はあるけれども、今夜の月は、あの時にもまして朗かである上に、湖の廣さもまた甘棠湖よりは遙かに大きい。水のおもてといふものは、それでなくてもかういふ晩には、實際より廣々と見えるものだが、船がだんだん陸を離れるにつれて、私の行手にたたへられてゐる湖の水は、腹が膨がるやうに底の方から盛上つて來て、次

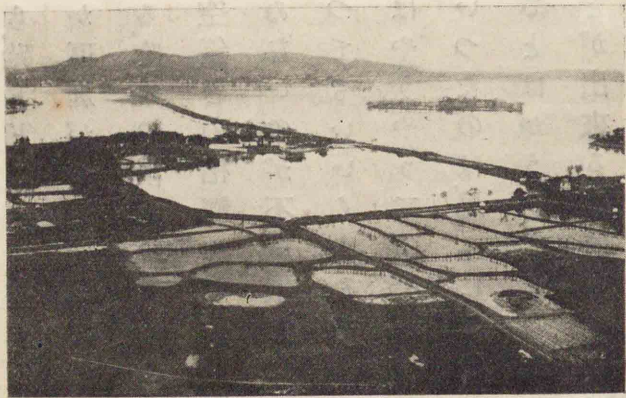
(一) 湖南省にある。支那第一の大湖
(二) 江西省の北部支那第二の大湖

鼓橋



一のそ 湖 西

第に岸を遠くの方へ追ひやつてしまふのである。ここでちよいと断つて置きたいのは、西湖の風景が美しいのは、主としてその湖水の面積が、洞庭湖や鄱陽湖のやうなばかばかしい大きさでなく、ひと目で見わたされる範囲に於て、蒼茫とした廣さをもち、優しい姿をした周囲の山や丘陵と、極めて適當な調和を保つてゐる點にあるのだと思ふ。雄大だと思へば雄大なやうにも見え、箱庭のやうだと思へば箱庭のやうにも見え、その間に入江があり、長堤があり、島嶼があり、鼓橋があつて、變化はありながら、恰も一枚の繪を展げたやうに、すべてが同時に雙の眸まなこにはいつてくる



二のそ 湖 西

のが、この湖の特長である。今夜にしても、船が進むに随つて、無限に大きく大きく開いてゆくやうに覺えながらも、陸は決して地平線の向うへは隠れてしまはないが、その實、岸邊の山だの森だのは、地平線より却つてずつと遠くにあるもののやうに感じられる。首を擧げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろそろと眼を下の方へ向けると、私の視野にはいるものは、やがてたゞ一面の波ばかりになつてしまつて、何だか船が水の上を渡つてゐるのではなく、水の底に沈みつゝあるやうな心地がする。その上、この湖の水は、月明りの

吃水

せいもあらうけれど、さながら深い山奥の靈泉のやうに透徹つて
 あるので、鏡にも似たその表面に、船の影が倒に映つてゐなかつた
 ら、殆どどこから空氣の世界になり、どこから水の世界になるのだ
 か區別がつかないほど、底の方まではつきりと見えてゐるのであ
 る。吃水の浅い、草履のやうに薄つぺらな船の上に横たはつて、水と
 空氣との相觸れる平面を滑かに進んでゆく私の體は、たゞ濡れて
 ゐないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潛入したとい
 つてもいいくらいである。舷に顔を出して底を見きはめると、深さ
 はやうやう二三尺か四五尺よりない。林和靖が「疎影横斜水清淺」と
 いつたのは、思ふにこの湖のことであらうが、「水清淺」の意味と美し
 さとは、かうしてこの底を眺める時に、始めて明らかに會得するこ
 とが出来た。私はさつき、深山の靈泉のやうに透徹つてゐるといつ
 たけれども、たゞそれだけでは、到底この時の感じを言表すにはも

(一) 宋の詩人。名は逋。字は和靖。西湖に結廬。山四面に梅を植ゑて、四十年。天聖四年。西暦一〇二〇年。歿。年六十二。

(二) 林和靖の山園。小梅の詩の句。

羅衣

の足りない。なぜかといふのに、ここにたたへられてゐる三四尺の
 深さの水は、靈泉の如く清冽なばかりでなく、一種異様な例へば、と
 ろろのやうな重みのある滑かさ、と、飴のやうな粘とをもつてゐる
 からである。この水の數滴を掌に掬んで、暫く空中に曝して置いた
 なら、冷やかな月の光を受留めて、水晶の如く凝りかたまつてしま
 ふだらう。私の船の艚はそのねつとりした重い水を、すらりすらり
 と切つて進むのではなく、ぬらぬらとこね返すやうにして、操られ
 て行くのである。をりをり艚が水面を離れると、水は青白く光りな
 がら、一枚の羅衣のやうに、それへべつたりと纏はり着く。水に纖維
 があるといつては、をかしいけれども、全くこの湖の水は、蜘蛛の絲
 よりも更に微かな、さうして妙に執拗な彈力のある纖維から成立
 つてゐるやうにも感じられる。とにかくにも綺麗に澄んだ水では
 あるが、輕快ではなく、寧ろ鈍重な氣分を含んだ水なのである。そん

な感じがするのは、一つには、その水底みなぞこに蒼苔のやうに細かい藻草が密生してゐて、柔かいビロードの床のやうな、暗緑色の光澤を反射してゐるせいでもあらう。實際それは、非常に精巧な、驚くほど美しい艶と潤ほびとをもつたビロードといふより、外に適當な言葉を知らない。さうして大空の月の女神は、そのビロードの地質を一層艶々と光らせる爲に、無数の長い銀の絲で、蛇のうねりのやうな波紋を一面に縫取つてゐるのである。若しこの湖に仙女があるならば、かの女の纏ふべきマント(一)の色は、必ずこのビロード色であるに違ひない。底が餘りに浅い爲にどうかすると、艚は心なくもそのビロードの面をかき亂す。ほつと砂埃が風に舞上るやうに、濁つた泥が圓い輪を描いて、煙のやうに水中に浮かび上る。

柳浪聞鶯の前を通り過ぎた船は、今度は進路を西に取つて、湖の中心へ漕いで行つた。左岸に黒くかたまつてゐる背の低い一叢の

Marle.

(二)共に西湖の邊にある山。



西湖の部一(三)潭印月

林は、恐らく桑畑か何かであらう。右岸はと見ると、——船が私の知らぬ間に、ぐるりと方向を一轉したので、何だかかう急に眼が廻るやうに、周圍が闊然(一)とうち開け、寶石山の保叔塔が、波に没しかかつた帆柱のやうに、遙かな空にぼうつと夢の如く淡く霞んでゐる。その左の葛嶺(二)の山の裾に、灯がちらちらと瞬いてゐるのは、新々旅館だらう。ここから眺めわ

たした様子では、向岸までは非常に遙か、西湖は海の如く擴がつてゐる。然し、海にしては水面が穩か過ぎて、殆ど波らしいものは眼に留らない。私の體が蟲けらのやうな小さいもので、偉大な大理石の圓盤の中に置かれてゐるのかとも想像される。子供の時分に野

(一)湖の中にある
小さい島の山

原の真中などで、眼を瞑つてぐるぐると廻つた後で、またはつと眼を開くと、よくこんな廣々とした、氣が遠くなるやうな天地の大きさを感じた覺がある。だが、それよりもなほ不思議なのは、そんなに廣々としてゐながら、どこまで行つても、水は依然として二三尺の——或はせいぜい人間の胸のあたりまでつかるくらゐな深さしかない。西湖は湖ではなくて、恐しい大きな池であるかの如くに、その時しみじみと感じられたのであつた。巨人が箱庭を作るとした、ら、きつとこの西湖のやうなものが出来るに違ひない。この湖がこのやうに静かなのは、さうしてその面にあらゆる物象が鮮かな影を印してゐるのは、畢竟、水底がかくの如く浅い爲に、波らしい波が立たない結果なのであらう。盪の中にも山の影は映るやうに、たとひ二三尺の深さでも、水はやつぱり水である。正面に鬱蒼と堆く盛上つてゐる。孤山(一)の翠嵐を始めとして、その左に低く長く、女性的な

(一)以下いづれも
西湖の三面を
圍んだ山

優雅な曲線を起伏させてゐる。天竺山、棲霞嶺、南高峰、北高峰の山々が、月の光に融けてしまひさうに、朦朧と消えかかりながらも、なほその影を一つ一つ倒に映してゐる莊嚴な姿に接した時、どうしてこの湖の水底の浅さに考へ及ぶ餘裕があらう。——潤一郎傑作集——

二二 黄菊白菊

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな。

嵐雪



嵐雪筆蹟

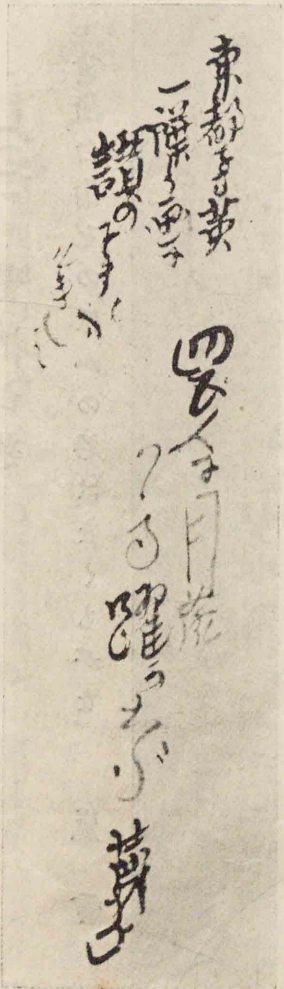
角力とり並ふや秋のから錦嵐雪
(一)向井氏。俳人。芭蕉の門人。寶永元年(一七二四年)歿。
(二)西山氏。俳人。天和二年(一六八二年)歿。
(三)三和二年(一六八二年)歿。
(四)年七十八。

秋風や白木の弓に弦はらん。
名月や池をめぐりて夜もすがら。
白露や無分別なるおきどころ。

去(一)來
芭(二)蕉
宗因

まざまざといますがごとし魂祭
いなづまやきのふは東けふは西
小坊主の門に立ちけり秋の暮

季吟
其角
関更



蕪村筆蹟

山は暮れて野は黄昏の薄かな

蕪村

二三四 四季小品

一 春雨

中島廣足

萱茸ける軒は、雨の音靜かにて、池水のあやこまやかなるに、いと

(一)國學者。號は樞園。文久四年(二五〇四)年歿。著は詞玉の緒の小籙等文集といふ。

東都なる英一蝶か畫に
けられは
四五人に月
落かゝる躍
かな
蕪村

(一)北村氏。國學者で併人。寶永元年歿、年八十二。
(二)高桑氏。寛政十一年(二四七三)年歿、年七十九。

いといたう

深う霞める梢より、つばさしをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひとときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたたきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。

樞園文集

二 風鈴

香川景樹

月の晴れわたり、花の散行く時々を告ぐる、いとあはれなり。かに入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめき出でし夕暮に聲あはせたるものにも似ず。

三 砧

清水濱臣

近しと聞けば遠く。遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの砧をさそふにやあらん。砧の音の雁がねに通

(二)國學者。春海の門下。文政四年(二四二二)年歿。著は語林類聚、泊筆話等。

(一)歌人。天保十四年(二五七〇)年歿。著は桂園一家集、桂園拾遺等である。入相

ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き故か。皆あらず。聞く人の心の寂しきなり。

——泊酒舎文集——

四 秋の山田

(一) 藤井 高 尙

秋の山田は夜こそ殊に寂しきもの、さすがにをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ、鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、とりあつめてあはれなること多かり。かく心をつくしてもるとはすれど、曉近うなりては、うちまどろむにやあらん、物の音なひもたえだえなれば、小屋近く鹿の寄り來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顔なりや。

五 冬のこころ

(一) 伴 蒿 蹊

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がれ、木の芽はる雨も時雨

(一) 國學者、宣長の門下、天保十二年歿、伊勢物語新釋、伊勢の著があるべし

音なひ

いぎたなさ

(二) 國學者、文化三年(一四六六年)歿、年七十四、閑田文章、國歌八論、近世吟人傳等の著がある

うなる子

(一) 「少壯幾時兮奈老何」漢武帝、秋風辭

(二) 「丈夫爲志窮當益堅」老當益壯(後漢書馬援傳) ひとやごもり

に變り、それもいつしか染めぬべき物なくなりぬれば、雲に移りて雪と積る。一歳の月日は、隙行く駒のほどもなきかな。振分髪のうちの子が大人しくなりぬといはれしなん、やがて老の始にて、終に鬢髪ハヅレの白くなりぬるを、しも、つくづくと思ひ較べて、埋火の許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし、少壯シヤウシュウいくばく時ぞ、老をいかん。とからうたにも聞ゆるを、徒に朽ちはてぬること、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の戒てふこともあり。我にな倣ひ給ひそよ。冬は歳の餘りともいふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそといはまほし。老いては益、壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。たゞ寒きにたへねば、ひとやごもりに、籠るほどに、ねぶりは宵より兆して、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の心をうつすとやいはん、冬の心をうつすとやいはん。

二四 人格の表出

倉田 百三

(一)劇作家。明治二十四年廣島縣に生まれた。出家とその弟の出家と静思の著がある。
内面生活

我々の感情や意志の表出は、我々の人格がいかなるものであるかを、直接に他人に印象せしめる機会である。我々の内面生活は、自然に肉體的表出を求めようとする衝動をもつものである。然しながら、我々が他人に對してこの表出を印象しようと欲し、或は自然に印象すべき位置に置かれた時、その表出のし方は、對人關係の道徳に依つて制約されなければならない。表出のし方が自由であり、自然であり、その場所と時とにふさはしい、即ち禮に適ふか否かは、我々のカルチユアの程度を示す標幟であるが、自分はここでは、特に我々が卑しむべきものとして考へねばならない、即ち我々が人格の尊威を傷つけるやうな表出のし方のみ選んで擧げる。我々の内面の状態が、即ち表出されるところのものが、卑しむべ

[Culture]

衝動

きものである時、その自然な表出が卑しむべき印象を與へることはいふまでもない。然し、我々の内面の状態が卑しむべきものでなくとも、その表出のし方が人格の尊威を傷つけるやうなものである時には、それはなほ卑しむべきものとなる。例へば、我々が飢を感じることは自然である。然し、我々がかの犬の如くにその飢を露骨に表して、もの欲しさうな眼付をして他人の食膳を窺ふならば、それは自己の人格の尊威を保ち得ないものとして、卑しまれねばならない。隣人の愛に飢ゑた時に於ても、その人間らしい孤獨の寂しさや飢渴をも、餘りに哀願的に相手と時と場所とに對する考慮を費す餘裕なく表出することは、人格の尊威を傷つけないではおかない。すべて他人の感情に訴へ過ぎる、女々しく、未練がましく、愚痴っぽい表出は、高貴の徳と一致しないものである。決して自己の内面の現實を他人に隠蔽することがいいといふのではない。自己の

苦痛や悲哀に堪得ることが、人格の尊威を構成する重要な力だからである。我々が他人に向かつて苦痛や悲哀を訴へることは、却つて彼等の苦痛や悲哀の原因となり、これに對する同情と奉仕との義務を負はせることになる。しかも多くの人は自己の無力や、運命の不可抗力や、己みづからの不幸の爲に我々の愁訴を容れる餘裕のない場合が少くなく、その爲彼等を徒に窘窮せしめるに過ぎない結果となる。これ我々が自己の苦痛や悲哀を他人に表出することを、出來得る限り抑制しなければならぬ所以である。故に自己の苦痛や悲哀の表出に關しては、^(一)ストイック的な寡黙の方が、高貴の徳と一致する。瘠我慢や負惜みのやうな不自然さは賞讃すべきものではないが、なほそれは卑しむべき感を與へない。然し、自己の負ふべきものを負はず、自己の過失や蟲の良さを棚に上げ、過剰にして亂れた表情を以て泣き訴へることは、人格の威嚴を傷つける。

[Stoic]

しかもそれが何等の効果なき愚痴の場合に於てなほ更である。不可抗な運命を勇ましく負うて忍受することは、人格の尊威と力との靜的な現れとして、尊い感を與へる。單に苦痛や情哀の表出ばかりでなく、愛や、好意や、怒や、その他すべての感情の表出が過多で輕しいことは、高貴の徳と一致しない。この點に於ては、自分は西洋風の表出よりも、東洋風の表出を好むものである。殊にかの能樂に於ける表出法は、最も洗練され、簡素で、しかも效果的である。素より自分は天真や、率直や、人間らしい隔なさを愛するものである。我々野原を散歩して、そこに出會つた見知らぬ人に直ちに話しかけたにしても、それを必ずしも間違とは思はない。寧ろ、かかる態度の何等のわだかまりなく執れるやうになることを、自分の理想の境地とするものである。然し、かかる態度を高貴の徳に反せずして執得る爲には、我々の内心が清淨で無礙でなければならぬ。

無礙

あらう。自分がここに擧げたのは、人間らしさの段階に於て、卑しむべき表出である。人間らしい表出として卑みに洩れ得るものは、神の目に於ても、少くとも愛するに堪へたものと成り得るであらうと信ずるからである。然し、我々は天使らしい段階より自己の卑しさを省得るまで向上することを願はなければならぬ。

二五 新時代の修養

(一) 杉森孝次郎

人類の生活を大別すると、経済的と文化的との二つになる。そして今日の文明諸国民の経済的生活は、既に甚しく國際的になつてゐる。貿易が即ちこれを證明する。今日の製造家で、その材料を國內だけから仕入れることが愛國的必要だと心得てゐるものはない。日本ならば鐵や棉をアメリカ及び印度から輸入する。また製作品を賣るに當つても、自國民にだけ供給することが愛國的必要だと

(一) 評論家。早稲田大學教授。明治十四年靜岡縣に生まれ、新社會の再生。新社會の倫理學、社會學等の著がある。

心得てゐるものもなく、誰も世界の隅々にまで賣り擴めようとする。また一個の消費者即ち普通の買手にしても、自國の製品でなければ買はないといふことが、愛國的必要だと心得てゐるものもない。要するに、經濟的生活は世界的になりつゝ、あるといふ事實が見される。

(二) Edward Jenner

(西曆一七四九年) 一八二三年

(三) Wilhelm Konrad Roentgen
の物理學者
西曆一八四五

轉じて文化的方面を見ると、世界主義の發現は一層顯著だ。イギリスのジェンナーが種痘法を發見すると、戦時中のドイツ人も平氣でこれを実行した。またドイツのレントゲンがX光線を發見すると、英佛の負傷兵も安心してそのお蔭を蒙つた。一國の學者が新學説を發表し、一國の藝術家が新創作を發表すると、その學問上の友人と藝術上の知己とは國境に拘らず、地球の東西南北に簇出する。かくの如く、經濟的生活と文化的生活とが世界的になりつゝ、ある時代に於て、吾人の道德思想だけが鎖國的または排外的であつ

てよいはずはない。自己發展、自國發展の爲にも、世界に貢獻する意志が國民各自の事業や行動の根柢に健在してゐることを最も必要な條件とする。國內の惡を世界の公惡として除斥し、國外の善を世界の公善として助成する誠意がなくてはならない。自國民ならば道徳的に劣惡であつても優遇し、他國民ならば道徳的に優勝であつても虐待するといふ方針は、各國ともにこれを改める必要がある。

然しながら、言語が異り、血縁が遠く、風俗習慣及び歴史を共通にせず、居住地域が遠隔であるといふ事實がなほ今日の程度に於て存在する限りは、遽かに國際主義の直接實現を企てることは無理である。現に經濟生活を見ると、列國とも保護主義を執つてゐる。この保護主義即ち關稅制度の現存することは、列國がいづれも自國本位主義を執つてゐる證據である。歐洲戰爭の原因、經過及び戦後

國際主義

の實狀を精査すると、如何に自國本位主義が世界主義よりも優勢になつてゐるかが解る。この自國本位的傾向と世界主義的傾向の兩者を完全に支配することは、今後の各國民の要務である。人間は理性の外に欲望をも情愛をも恐怖心をもつてゐる。この人間の本性の全體を組織的に支配することは、個人として世に處し、人と交際する上に於ても、また國家として世界の各國と交る上に於ても、共に必要である。

要するに、個人についていへば、各自が強い善人になること、勇氣ある智者になること、人道的聖志のある英雄豪傑になることが、新時代の修養の要件であり、國家についていへば、自國をして隣國、他國、世界列國にとつて有用で必要な國にならせることが、新時代の愛國の要義である。

改新帝國讀本 七卷終

附 録

和 歌 百 首

春夏秋冬

二見がたこち吹く風にあけそめて神代のまゝの春は來にけり	加藤 千 蔭
一つもて君を祝はん一つもて親を祝はん二本ある松	落 合 直 文
つはものに召出だされし我が背子は何處の山に年迎ふらん	大須賀まつ江
雪のうちに梅の初花咲きにけり君がかざしに捧げてしがな	吉田 諏 訪 子
あはれとも人は聞かずや籠の中におのが時知る鶯の聲	僧 似 雲
鶯よなど汝は鳴くぞ乳やほしき小鍋やほしき母や戀しき	或 少 女
尋ねつる宿は霞にうづもれて谷の鶯一聲ぞする	藤 原 範 永
初瀬野や里のうなるに宿とへば霞める梅の立枝をぞ指す	僧 契 沖
奈古の海の霞の間より眺むれば入日を洗ふ沖つ白波	藤 原 實 定
薄墨に書く玉章と見ゆるなり霞める空に歸る雁がね	津 守 國 基
春風の霞吹きとく河つらに晴れぬ煙や柳なるらん	村 田 春 海

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に如くものぞなき
 大江千里
 大偃川月と花との朧夜にひとり霞まぬ波の音かな
 小澤蘆庵
 吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻かな
 源義家
 薄く濃き野邊の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむらぎえ
 宮内卿
 つくづくし手に持ち眠る幼兒は夢も春野になほまよふらん
 落合直文
 狩人の朝ふむ小野の草わかみ隠るひかねて雉子なくなり
 俊惠法師
 庵むすぶ山の麓の夕ひばりあがるも落つる聲かとぞ聞く
 僧慶運
 夕月夜潮みちくらし難波江の葦の若葉を越ゆる白波
 藤原秀能
 すくすくと生ひたつ麥に腹すりて燕飛びくる春の山畑
 橘曙あけ覺み
 夏草の茂みが下の埋れ水ありと知らせて行く螢かな
 後村上天皇
 ますらをの狩ゆく野邊の草しげみ引くや眞弓の末ばかり見ゆ
 藤原爲子
 露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野の原
 太田道灌
 伊吹山峰に動かぬ夕立の雲こそ今日の暑さなりけれ
 氷室長翁
 庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな
 源頼政

緑しく池の蓮の葉より葉に露をまろばす風の涼しさ
 澤田名垂
 杉の葉に朝霧たちて日ぐらしの聲いさぎよき朝ぼらけかな
 熊谷直好
 つらかりし寢覺の音も忘られて明くれば拾ふ庭の朝粟
 望月長好
 稻妻の光の内に立つ嶋の影こそ見ゆれ小山田の里
 高橋殘夢
 野邊廣き四方の草葉の蟲の音を集めて一人聴く庵かな
 本居大平
 明石潟浦路はれゆく朝なぎに霧に漕入るあまの釣舟
 後鳥羽天皇
 住吉の松を秋風ふくからに聲うち添ふる沖つ白波
 凡河内躬恒
 鶉なく眞野の入江の濱風に尾花なみよる秋の夕ぐれ
 源俊頼
 出でぬ間の心づくしを山の端に取返すまで澄める月かな
 木下長嘯子
 雲はみな拂ひはてたる秋風を松に残して月を見るかな
 藤原良經
 山深み落ちて積れるもみぢ葉の乾ける上に時雨ふるなり
 大江嘉言
 群鳥の梢はなるゝ心地して有明の月に散る木の葉かな
 八田知紀
 武士の矢なみつくるふ籠手の上に霞たばしる那須の篠原
 源實朝
 なかなかにつららをりなる路絶えて雪に隣の近き山里
 伊達政宗

君が代

駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ
 月宿る澤田の面に臥す鳴の氷より立つあけがたの空
 志賀の浦や遠ざかり行く波間より氷りて出づる有明の月
 眺めには飽かぬ箱根の二子山誰が越す嶺のみ雪なるらん
 集めても光は添はで窓の雪かひなくつもる年の暮かな
 昨日といひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり
 君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖なるらん
 唐土の代々はうつれど神代より大和島根は久しかりけり
 御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば

海犬養宿彌岡麻呂

税所敦子
 後醍醐天皇
 藤原隆俊

心

親子

ば
 今日よりは願なくて大君の醜の御楯と出で立つ我は
 曇らぬを神代のまゝの心ぞと空にいさめて月や澄むらん
 心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん
 何ごとのおはしますかは知らねども忝さに涙こぼるる
 勅をして祈るしるしの神風に寄せ来る波ぞかつくだけつる
 海ならず湛へる水の底までも清き心は月ぞ照らさん
 つくづくと思ひくらし入相の鐘を聴くにも君ぞ戀しき
 しるがねも黄金も珠も何せんに優れる寶子に如かめやも
 世の中に思あれども子を戀ふる思に勝る思なきかな
 いはけなく如何なる様に辿りつゝ死出の山路をひとり行くら
 ん
 たらちねはかゝれとしてしもうば玉の我が黒髪を撫でずやあり
 けん

宗良親王
 今奉部與曾布
 三條西實隆
 藤原爲氏
 菅原道眞
 八歳宮
 山上憶良
 紀貫之
 土岐しげ子
 僧正遍照

勉學

さし昇る朝日に君を思ひ出でむ傾く月に我を忘るな
 別路の惜しき心は變らねば遠く送りしかひなかりけり
 忘れなん今はた物を思はじと思ふも物を思ふなりけり
 おすもまた朝よく起きてつとめばや窓にうれしき有明の月
 埋火の影にて見ると思ふ間に文の上白く夜はあけにけり
 これのみぞ人の國よりつたはらで神代をうけし敷島の道
 敷島の 大和錦に織りてこそ唐紅の色もはえけれ
 よりそはむ暇はなくとも文机の上には塵をすゑずもあらなん
 人はよし唐につくともわが杖は大和島根に立てんとぞ思ふ
 底ひなき淵やは騒ぐ山川のあさき瀬にこそあだ波は立て
 急がずば濡れざらましを旅人のあとよりはる、野路の村雨
 未つひに海となるべき谷川もしばし木の葉の下くぐるなり
 偽のなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし
 事足れば足るにも慣れて何くれと足るがうちにもなほ嘆くか

藤原通俊
 木下幸文
 落合直文
 僧 涌 蓮
 香川景樹
 藤原爲相
 光格天皇
 明治天皇
 平田篤胤
 素性法師
 太田道灌
 伴 蒿 蹊
 作者不詳

修養

旅

宿かさぬ人のつらさを情にて朧月夜の花の下ぶし
 家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る
 都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關
 和歌の浦に潮みち來れば瀉を無み葦邊をさして鶴鳴さわたる
 駒の蹄ぬらさぬほどの波寄せて月靜かなる打出の濱
 信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷺の翼もたわに吹く嵐かな
 富士のねの麓を出でて行く雲は足柄山の嶺にかゝれり
 聞きしよりも思ひしよりも見しよりも登りて高き山は富士の
 嶺
 昔思ふ鶴越の高嶺よりはげしくおろす夕嵐かな
 武士の命を露とあらそひし荒野の末に秋風ぞ吹く
 命をばかろきになして武士の道よりおもき道あらめやも
 思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身慣れんものとは

松平定信
 太田垣蓮月
 有馬皇子
 能因法師
 山邊赤人
 千種有功
 賀茂眞淵
 同
 荷田春滿
 橘 守 部
 石川依平
 源 政 雄
 宗 良 親 王

國家有事

君臣

劔太刀いよ磨くべし古ゆさやけく負ひて來にしその名ぞ
 我が胸の燃ゆるおもひにくらぶれば煙はうすし櫻島山
 矛とりて守れ宮人九重の御階の櫻風そよぐなり
 た、かひのかちのたよりをきく毎にみ軍人の身をおもふかな
 君のため散れと教へておのれまづ嵐に向ふ櫻井の里
 歸らじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとむる
 誰が身にもありとは知らで惑ふめり神のかたみの大和魂
 君が代を思ふ心の一すぢに我が身ありとも思はざりけり
 親思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらん
 世と共に語りつたへよ國のため命を捨てし人のいさをを
 うつし世を神さりましたし大君の御あと慕ひて我は行くなり
 大伴家持
 平野國臣
 孝明天皇
 昭憲皇太后
 野矢常方
 楠正行
 野村望東尼
 梅田源次郎
 吉田松陰
 明治天皇
 乃木希典

改新帝國讀本卷七附錄終

浦野製

昭和四年九月二十三日
 昭和五年二月二十五日
 昭和五年二月八日

改新帝國讀本 奥附

編者 芳賀矢一
 訂補者 上田萬年
 同 長谷川福平
 發行者 東京市神田區通神保町九番地
 代表者 坂本嘉治馬房

昭和五年	昭和五年	昭和五年	昭和五年	昭和五年	昭和五年	昭和五年	昭和五年	昭和五年	昭和五年
度	年	年	年	年	年	年	年	年	年
卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢	各金七拾參錢
卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢	各金四拾五錢
卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢	各金四拾壹錢
卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢	各金拾五錢
卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢	各金拾參錢

部刷印房山富 所刷印



發行所

東京市神田區通神保町九番地
 合資會社 富山房

電話九段一三二—一九三五番
 振替口座東京五〇一一番

